

---

# 音の無い世界 ~オトノナイセカイ~

A-R-K

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

音の無い世界 ～オトノナイセカイ～

### 【Nコード】

N3259F

### 【作者名】

A-R-K

### 【あらすじ】

「ウワサ」と「殺人事件」の繋がりとは？「オトノナイセカイ」が招く死の連鎖は止められるのか？様々な人物が交差していく。無数に散りばめられた謎を解き明かすことは出来だろうか？全てはある男と女から始まった……。

「序」 第一話：アンティーク喫茶（前書き）

いわゆるプロローグにあたる「序」は全七話で構成されています。

本編はその後から始まります。

## 「序」 第一話：アンティーク喫茶

誰もが恐怖する。その無の世界に。

誰もが恐怖する。自分のいない世界に。

日付が変わろうとするその時、サトミは帰宅した。

殺風景な部屋に大きく陣取ったクイーンサイズのベッドへ鞆を投げ捨てるように置き、そのままサトミは横たわった。鞆からヴァージニアスリムを取り出し、何も考えずに天井のシミを見つめながら燻らせる。

妙だ。

今日もいつも通りの帰宅時間だ。

仕事は定時で終わっているが、帰りにいろいろな所へ行つて時間を潰して帰ってくるのが日課だ。日によってコースは違ふがだいたい決まっている。

ウィンドウ・ショッピングもすることはあるが、本屋に立ち寄ることが多い。主に仕事の為のデザインや写真の物色がほとんどだ。最後はいつもの繁華街から外れた所にある古ぼけたアンティーク喫茶でクラシックを聴きながら絶えず鞆の中に持っている小説を読む。

時々、マスターの趣味なのか、はたまた気まぐれかは知らないが、ジャズが流れることもある。流れるジャズはどれも悲しげで、

悲哀に満ちた空間を作り上げる。「まるで演歌」だと苦笑いしてしまふ自分が滑稽だ。私にはどの曲も同じように聞こえるからあまり好きじゃない。しかし店の雰囲気にはこのBGMが心地よい演出になっているようにも思える。でも、それははっきり言って私にとって曖昧なことではない。

私はいつも決まってジャン・コクトーを読んでいる。暇があればページをめくるのが楽しみになっていた。文字を追うことが私の唯一の救い。内容は関係ない。文体に惹かれる作家の本ならなんでもかまわないのだ。だから別に他の作家の作品でも構わない。

しかし以前、友人に勧められたサガンという作家の小説を読んだことがあったが、あれはつまらなかった。吐き気がするほどだ。あの女は何故あんなに進めたのだろうと思った。酷くロマンティックを気取っていたような気がする。ロマンティック？ ラブストーリー？ 笑わせる。興味がないのですぐに読むのをやめた。以来、彼女とは連絡を取るのをやめた。

店内にはサトミとマスターだけ。

週末だというのにも関わらず客は私だけ。特に珍しいことではない。時々、経営が成り立っているのか？ と疑問に思うこともあるが、それは考えるだけ野暮だ。

趣味。この店はマスターの趣味なのだろう。それ以上でもそれ以下でもない。身の上を聞くほど私は他人に依存したくない。

いつも私はカプチーノを頼む。

シナモンのほのかな香りとアンティーク風の雰囲気がいつの間にか私を虜にしていた。

店のインテリアはアンティークなアールデコ調で統一されている。カウンターの横に飾られた浮世絵風の絵画は場違いにも見えなくもないが、意外と違和感はない。アールデコ調のせいだろう。一際目立つような価値がありそうなものはないが、まるでこの店自体

が一つのアールデコの絵画のようだ。マスターさえもその登場人物なのかも知れない。

店のマスターとはほとんど話さない。以前に一度話した事はあったが、彼とは会話が成り立たなかった。アンティークの一部のように、店に溶け込んでいるかのような彼は子供の頃に読んだ絵本の中から飛び出してきてたようだ。霧に包まれたような淡いイメージ。彼と話すとは本当に童話の世界に入ってしまうような錯覚を覚えた。あれが本当に錯覚かどうかなんて誰にも証明できないから、ひどく曖昧だ。

ここにしていると何もかも忘れてしまうのような錯覚に包まれる。

別に日常に嫌気がさしているわけでも無いので得には気にならない。普段なら全く気づくことのなさそうな店。目を懲らさないと分からないかもしれない。人通りの少ない道だけによけいに気づく人はいない。この店が本当に存在しているのかすら疑わしいと思う。そんな風に考えてしまう自分が少し可愛くも思ってから滑稽だ。この店にいると普段気づかなかった自分の一面が見えてくるような気がするから不思議だ。

初めてこの店に訪れたのはほんの一ヶ月前。今まで気づかなかったのに……。

そして、誘われるままに入ったのだった。それ以来、毎日のように通ってる。お気に入りとはまた違う。そう言ったものではなく、当たり前でもない。

「今日はどうされました」

不意にマスターが口にした。

カウンターの奥、壁側一面にぎっしりとつまったレコードを見つめ、何かを探すそぶりを見せながら、マスターはタバコに火をつけた。

マスターは年の頃が五十代といったところであろうか。口ひげ

がそう見せているのようにも思えるし、少し白髪しらがの混じった髪がそう見せているのようにも思える。はたまた音楽の趣味がそう連想させるのかもしれない。だが、それだけでは分らない。ただ漠然とそう見えるのだ。

アールデコ調の店とはうらはらにマスターの服装は、意外とだらしない。Ｔシャツにデニムといったありふれた格好だが、そこには彼なりのこだわりが見られる、そのような出で立ちだ。決して不格好ではなく、むしろ紳士的に見えるのがこのマスターの不思議なところだ。

ガラムであろうか。独特の“キツイ”タバコの香りがサトミにも感じられる。ガラムのせいか、一気にアールデコ調の雰囲気が一変し、ふいにバリの空気を連想させた。

「よく分かるわね」

サトミは本を閉じ答えた。

私の時間を取らないで。そういつもなら思うところだが、確信を突かれたかの如く、サトミもまたタバコに火をつけた。

「ケルトの音楽をかけてもよろしいでしょうか」

マスターは微笑ほほえみながら、捜し物を見つけたという顔をして、返事を待たずにかけ始めた。「ええ、いいわ」と答えようとしたサトミもまた苦笑する。

フィドルが印象的な曲が流れはじめ、心地よい気分になれた。

そうか。これはケルトの音楽なのか。そうサトミは納得する。

何度か耳にしたことはあったが、どこの国の音楽かまでは分からなかった。ただなんとなく懐かしい気分させてくれる、そんな音楽という印象だった。

「ケルト民族の音楽と想像されるでしょうが、実際のところは西ヨーロッパのケルト人から伝承した伝統音楽の類の総称なのです。アイルランド音楽やスコットランド音楽とも言われますが、アイデンティティーや文化に強く由来していますので、これらは全てジャンルがきちんと分かれています。商業的な要素も多いので難しいとこ

ろです」

一通り話し終えたところで、「ですが、音を楽しむのに境界線はありません。難しく考えずに聞いてみて下さい」とマスターは付け加えた。

「好きだわ。こういうの」

懐かしい気分になさてくれる音楽。でも頭に描く、その懐かしい光景は幼少や子供の頃といったものではない。人としての懐かしさ、そんな例えでいいのだろうか？ それは分からない。三十路を超えた悲しみからの懐古的なものではないのは確かだ。私の体が持っている古代からの遺伝子の記憶とでもいうのであるうか。そんな冗談のような錯覚までしてしまうほど心地よい気がする。

「お気に召したようですねにより」

そう言うマスターはサトミにカプチーノのお代わりを出した。何も言わなくてもいい、私のおごりですと、言わんとばかりの表情だった。それは自分の趣味へ理解を示してくれたサトミへの礼なのであろう。

「最後にいい曲を聴かせてもらってありがとう」

サトミは言った。それはもうここへは来ないという意味であったことは明白であった。

「ええ、分かっています。それは一つの終わりを示しています。お気を付け下さい。私に出来ることはさせて頂きました。後はお客様、あなた様の行動次第です」

私はカプチーノの手を取った。

マスターの言ったことの意味が分からない。ただ……漠然と……理解出来た、気がした。

少しノイズのようなものを感じようにも思えるが、それはもちろん気のせいなのだろう。

私は私でありたい。そう思えた。



そして雨は降り出した。

## 「序」 第二話：夜驚

この夜、関東一帯に襲った豪雨はまるで一切の業を飲み込んでいくような様であった。

夜空に轟く音と光を楽しんでいる。

凄まじい光は見る者を虜にしてしまう場合がある。光をよく観察してみると様々な色で満ちているようにも見えた。

雷つて一色だけで光っているんじゃないんだな、と酷く感心した男は都内一角に立ち並んだ地上十五階のマンションの一室にある一際大きな硝子窓から雨の降る夜空を楽しんでいた。しかし光よりも表情を持たない恐怖に満ちた力強い“音”に惹かれる。この世に存在する打楽器なんかは非ではないな、と苦笑する。小さな音で流れるピアノとヴァイオリンの音に耳を傾けると、人格と言う“モノ”に依存している自分自身が不愉快になってくる。

男は音を必要とし、音は男を必要としない。

曖昧で憂鬱な雨の音を聞き分けるとよく分かる。雨自体に音はない。つまり音は音として存在することが出来ない。

物理的に音は音として存在するわけではなく必ず媒体となるものが存在する。それは風が空気をきる時に起こる摩擦であり、ドラムとスティックの接触により起こる摩擦であり、雨音もまた雨が何かに触れて起こる摩擦だ。

物質間に摩擦がない限り音は存在しない。音がないということは無でありそれは恐怖だ。

男は「音」を楽しんでいる。

楽しさついでに光と音の間を数えてみるが、そんな意味のないことをしている自分を嘲笑してみる。

そして自分の耳がすでに一番小さな音で流れていた音楽に支配

されていたことに気づいた。

ついさっきまでの自分との矛盾が男を一時的に不安にさせるが、思考はすべて停止し、自分が何をしていたかと気づくまでに幾分かの時間を必要とした。

今日あったことを事細かく思い出そうと試みたが、そんなことをして何の意味があるのだ、と再び嘲笑してみる。

よく嘲笑う日だ。

男は鏡を見て自分を確かめる。とくに苦勞もしない退屈そうな顔をした男の顔が映っているだけだ。

いつになくクリアな気分だと思いうちに浅い眠りの中に入り込んだ。音楽が遠くに聞こえるというような感覚は全く無視した突然の眠り。

音は眠り込んだ男などお構いなしに複雑に入り交じりながら鳴り続けている。

今日のクライアントには吐き気がした。全くどうなってやがる。話しにならない。

俺は怒りを覚えながら帰宅した。外食して帰ろうと思ったが、そんな気分にもなれやしない。

ヒール？ 誰だ？

玄関を見ると、ヒールがある。右足のヒールは無造作にこけてる。こんな脱ぎ方をするのは……サトミではないな。誰だ？

明かりをつけずにベッドへ行く。

月明かりが一人の女を映し出した。寝ている。というより、倒れ込んでいる。そのようにも見える。長く伸びた髪は激しく乱れている。

「お前はいつもそうだな。風邪ひくぞ。着替えるよ」

俺はそう言ったが……俺はこの女を知らない。

今日は冷える。毛布を被せてやろうと、俺は毛布を手にとった。

ぬるつとした感触。なんだこれは。暗くて見えない。

とにかくかけてやろう。

「おかえり……」

女は言った。起きたようだ。やはり知らない声だが、知ってるような気もする。

「着替えるよ」

俺は女の隣に添い寝するように横たわった。女の髪をかき上げてやる。

「今日も遅いのね。私さあ……」

女は言う。その顔はやはり知らない。でも懐かしい気がする。

話し途中で俺は女の口を口で塞いだ。舌と舌が絡み合う。この感覚……知っている。

初老の男が窓際に立っている。こっちを見ている。月明かりに照らされているせいで、その表情までは読み取れない。

誰だ？ まあいい。誰であろうと今の俺には興味がない。

俺はその初老の男を見ながらもキスを続ける。俺の右手が女の胸に這わしたところで、初老は言った。

「今日と言う日は一度しか訪れない。そう思っていないませんか？ 確かにそうです。ですが……可能性。その可能性を示すのはあなたの行動次第。またお会いしましょう」

気づけば、場面は変わっている。どうやら俺の部屋ではなく女の部屋のようだ。しかしキスは続いている。

突然女は唇を離し、俺の頬をなめ回した。やめるよ、と言おうとしたその時、激痛が走った。激痛と呼べるようなものではない。

熱い、激しく熱い。痛みで頭が麻痺するかのようなのだ。これはまずい。思考が停止する。何がなんだか分からない。頭が痛い……。頬？

頬が痛い？ 熱い？

「ぐあつ……」

声にならない声を出す。月明かりに照らされた鏡に俺が写った。俺は血塗れた。頬が黒い。どす黒く見える。穴？ そうか……その

時分かった。女が俺の頬を食い千切ったのだ。

俺はその様子を天井から見つめている。俺は俺を見ている。激痛が俺を襲うが冷静に天井から俺を見ている。上視点のカメラワーク。そのような感じた。

女は血塗れの口のまま「頬を食われた俺」を薄気味の悪い微笑みを浮かべながら見ている。「天井から見る俺」はそれをまるで映画を見るように見ている。

女は俺の頬と思われる肉片をだらりと口から出し、まるでよだれの如く、どす黒くなった血を垂らしている。不思議と俺は恐怖しない。痛みも気づけば無くなっている。だが、「もう一人の俺」は苦悶の表情のままだ。

気づけば俺はテレビを見ている。そう、さっきまでいた「そこ」をテレビから見ている。

テレビから聞こえる。女のセリフが少し聞き取りづらい。

『あ・だから・・・たしは・・・もう・・・ど・・・でも・・・いいのお・・・お・・・トを・・・』

あれ？ 女がいない？ 俺もいない？

突然テレビから登場人物が消えた。女の部屋も気づけば、白色の部屋が映し出されているだけ。何かの施設か？

画面がブラックアウトした。真っ暗だ。

「!？」

画面に……写っている……俺……そして女……。

テレビに反射して写っている俺と女。女は両手に何か持っている。鋭利ななにか。アイスピック？

そう思った瞬間、

「オトノナイセカイへようこそ」

そう聞こえた。確かに。しかし言葉で言い表せない激痛と共にそれが最後の「音」となった。

女は俺の両耳にアイスピックを刺したのだ。

一時間ほど眠りについてた男は突然目を覚まし、自分が何処にいるのか分からなくなり、何かを呟いた。

何を言っているのか本人も分かっていないはずだ。しばらくの放心状態。

男は思い出したかのように、タバコ（銘柄は確認出来ない）を取り出し、慌てて火をつけた。深く吸い込む。しかし寝起きのせいか、口の中がどうも気持ち悪い。タバコもまずい。買い置きしてあったペットボトルのミネラルウォーターを一気に飲み干すことでやっと落ち着きを取り戻せた。なぜか耳がじんじんする……。

部屋が少し荒れている気がする。男は思い返してみる。しかしいくら思い出したところで、荒れるような原因は見あたらない。何かを物色した、そういう荒れ方ではない。男は周囲から思われる性格とは裏腹に几帳面だ。部屋は常に綺麗に整頓され掃除もされている。なにより現状のような部屋の乱れは男自身が許せない。

さつきまでは確かに片づいていた。部屋の中で荒れている箇所は灰皿くらいだ。だからといって誰かが侵入したとも思えない。

男は気づいた。これは誰でもない。俺のせいだと。そうか「夜驚」か、そう思った。

この男には妙な持病がある。子供の頃は幾度と無くあり、親をよく心配させたものだ。

「夜驚」とは、睡眠中、著しい発汗をともなり、突然に大声で叫びだしたり、暴れるなどのパニック状態のこと。主に子供に多いものだが、中には大人でもなるものがある。

この男の場合、子供の頃、高熱が出るときに多く症状が出た。しかし中学に入る頃になるといつの間にか「夜驚」はなくなっていた。しかしここ数年、頻繁ではないが、何度かあったようだ。

ようやく焦点が定まってきた。目の前には壁に掛けたアンディ・ウォーホルのポップアートのバナナが見えた。

そうだな、気分を落ち着かせよう。もうすでに停止していた

DプレイヤーからCDを取り出し、違うCDに入れ替えた。ヴェルヴェット・アンダーグラウンドが低いヴォリュームで流れ始める。

コンコン……

ドアをノックする音が聞こえた。しかしその音は男を破壊する。男の脳裏に「破壊、破壊」と0と1の二進数のように、繰り返して、繰り返して、嫌な気分が吐き気のように恐ろしいスピードで頭の中を駆けめぐった。苦しい。胸が絞めつけられるようで、気持ち悪い。全てを断ち切られたような、自分の元を絶たれたような気がした。

男はただ空中に焦点も定まらないまま、目を開けていた。頭はすでに麻痺している。眠気など何も感じなくなる程に。それは丁度全力疾走しているときの状態、ランナーズ・ハイのようなものに何故か似ていた。

部屋の風景もいつもの何かと違うように、とてつもなく広く感じられる。感覚が鈍っている。頭も何かぼんやりとしていて、少しだけだが、脳が圧迫されているようなむず痒い<sup>がゆ</sup>感覚もある。狂気と殺意はいつも奥底で、まだかまだかと人を嘲笑うかのように待っている。

男はコカインとかヘロインなどの麻薬の常用者のような血走って濁った赤い目を鏡で見つめる。

目をこすって目のかゆみから逃れようとするが、かえって目は赤く充血する。目のかゆみは人を苛立たせる。しかしそれは現実として受け止めさせる作用もある。

男は目薬を差し、しばらくの間何も考えずに目を閉じた。再びノックの音がするまで男は何も考えずにいたが、狂気と殺意が薄れていくのが分かれると、静かに心を落ち着かせドアロックを解いた。

## 「序」 第三話：ある一つの決意

妙だ。と感じるのは何故だろう。

サトミはタバコを少し燻<sup>く</sup>らせるだけで、すぐに消した。フィルターについた口紅に一瞬目をやる。

シャワー浴びなきゃ……。

突然降り出した大雨でサトミはかなり濡れていた。酷く疲れたせいか、何も考えずにベッドに横たわったものだから、ベッドのシートも中途半端に濡れている。輪ジミが出来そうだ。しかしなかなか行動に起こせない。とにかく服を脱がないと風邪を引く。

サトミは濡れた服を脱ぎ、ベッドの側に置いてあるランドリーボックスに投げ入れた。

下着姿のままもう一度タバコに火をつける。帰宅してからもうすでに一時間近くも経過している。

明日はケルト音楽でも探しに行こうかな、と再び天井を見上げながら思った。今は何も考えたくない。そんな気分の今にこそあの音楽が私には必要かもね、とサトミは苦笑する。

天井には何故か薄黒いシミがある。そのシミはちょうど三十センチほどの大きさだ。入居した当時からあるが、その頃から比べると少し大きくなってるようにも見える。何度かポスターが何かで隠そうとも思ったが、面倒だし、なによりポスターを貼るという行為が自分自身許せない。

ちょうどベッドの頭の真上にシミが位置しているので、いつもサトミは寝る前にそのシミを見ながら就寝する。時には人の顔に見えたり、時には雲のようなものにも見える。それはもちろん物理的なものではない。その時の心境によって見えるものが変わってくるのだ。

なんのシミなのだろう。未だに分からない。真っ白な天井だから確かに気になる存在であることには違いない。



シミを見つめていると、訳も分からず性欲に支配されることが多い。でも今はそんな気分にはならない。いつしか私の中でシミは私に無くてはならない存在となっていた。私はこのシミとともにある。

電話が鳴った。

時計を見るとすでに日付が変わっている。週末のこんな時間に電話をかけてくるのはあの男ぐらいだろう。彼はなぜか携帯に電話してこない。

サトミはタバコを消し、さらにもう一本に火を付けてから深く吸い込み、天井に向かって煙を吐いた。そして少しの間をおいて電話にでた。

「もしもし」

電話相手はマサトだった。いつものように電話はかかってくる。普段はもっと早い時間だ。今日は週末のせいかな、いつもより遅い。

彼とは特に対した会話はしない。習慣のように義務的に会話をしているだけ。私はこれほど無意味な時間はないと思っている。でも不思議なことにマサトの声を聞いているだけで、体の奥が熱くなってくる。私の体は間違いなく欲しがっているのだ。

今日も退屈な話だけで電話を切ると、急いでシャワーを浴びることにした。風邪を引きそうだ。

マサトと出会ったのは去年の秋、だったということぐらいしか思いつかない。どうやって知り合ったのか酷く曖昧だ。本当に去年だったのか？ 秋だったのか？ それすら分からなくなってくることも多いのは事実だ。

出合いにそれほど重要性を求めているわけでもなく、彼に対して何を求めているわけでもない。

私がいることを誰かに認めてもらいたいのだろうか？ 自分の体を傷つけて快樂におぼれるのも寂しさからだろうか？

だけど一度も寂しいと感じたことはない。でもそれは気のせい  
かも知れない。

だが、そこには何もなく殺意にも似た感情が潜んでいることを  
私は知っている。どこまでも追いかけてくる。頭の中を駆けめぐる。  
いつか私と交わり、変わるまで私を苦しめるはずだ。

時に強く。時に弱く。人の精神状態は不安定が当たり前だ。

だからといって弱いままではどうしようもない。何故だろう……

……。酷く感覚が鈍っている。このままではいけない。

分かっている。わかっている……。言い訳が必要なのだろうか

？ 身の安全ばかりを気にする？ 安住の地がほしただけだろうか

？ 体が、頭が安らぎを求めているだけだろうか？

時々、すべてを捨ててしまいたくなる時がある。

時々、目の前にいる人たちを殺してしまいたくなるときがある。

時々、目の前にあるものをすべて破壊したくなるときがある。

そんな衝動に駆られるのは誰にでもあることだ。心の葛藤と言  
ってしまえばそれだけだが……。そんなに甘くない。普通は実行す  
ることはない。しかし、実行する者は異常者とみなされる。

ではいったいどんな差があるのだろうか？ モラル？ 自制心？

恐怖？ 関係ない。結果のみだ。ある者は恐怖から逃れるために  
……。

結局、逃げているのだろうか？ 何から？ 自分から？ 世間  
から？ 結局、マサトじゃなくてもいいのかも知れない。

誰だっていいのかも。ほかの男でも女でも。

私の右の乳首のピアッシングだって一つ間違えればただの物質。  
私は逃げようとしているのだろうか……。

サトミの部屋は都心から少し離れた郊外にある十階建てのマン

シヨンの六階にある。外装も内装も綺麗でまだ築二年だ。その割には意外と安い家賃となっている。

上京したときにはかなりの数の不動産を廻ったがここを見つけ  
た時、居場所が見つかった、などではなく「ここにしなければと駄  
目だ」と直感的に、それはある種の衝撃を感じたほどだった。

何よりサトミがここを選んだのもベランダから見える景色が郊  
外という事もあり綺麗だったからだ。東京でもまだこんなに美しい  
景色があるのだろうか？

とも思ったがそれは違うと思ったのもまた事実。この景色が作  
り物なのに、そんな感想を持つこと自体、なんの意味を持たないの  
かもしれない。

事業で出来た街。だから何？ 私には関係ない。通勤には少し  
不便だがサトミにとってそれは何の問題もなかった。

そのベランダからずっと外の景色を煙草を吹かしながら見てい  
ると、ふとした瞬間、飛び降りたいという衝動に駆られる時も、多  
くの星が散らばる夜空を見上げて、私は生きているんだと実感  
する自分を笑いたくなる。

何に浸る必要があるのだろうか？ サトミはただ、見ているだ  
けなのだ……。

私はなぜあのアンティーク喫茶へ行かないと決めたのだろう。

理由は自分でもよく分からない。そもそもあのアンティーク喫  
茶が実在するのかすら、すでにあやふやだ。

マスターが聞かせてくれたケルト音楽を思い出してみる。優し  
いケルトの音楽が私を包んでくれるかのよう。

そう言えばマスターが何か言っていた。でも思い出せない。

あの空間はまるで夢のような錯覚を思わせるどころか、まるで  
夢そのもののようにも思える。

……………行動。

そうだ、私はこのままではいけない。

私は私であるために、マサトと向き合わなくてはならない。

サトミは再び着替え、簡単に化粧をすると、足早にマサトの家に向かうことにした。

## 「序」 第四話：ホワイトノイズ

はっと気づくと私はベッドに横たわっていた。

何も思い出せない。

夢？ 私は夢を見ていたの？

まどろみが残っている。良い夢だったのかしら？　なんだか懐かしくて切ない夢だったようにも思える。

今、何時かしら？

壁時計を寝ぼけ眼で見ると、時計の針は八時を示していた。朝夜？　それすらよく分からない。曜日感覚もない。

部屋にカーテンの隙間から一筋の光が漏れている。いけない。遅刻する。

私は急いで支度をする、仕事場へと向かった。

いくつかの電車を乗り換え、会社へ出向く。今日は美容師の受賞用の小冊子を仕上げなければならない。

今日はほとんどの社員は来てないようだ。オフィスの一番目立つところに設置してある伝言板を見ると、今日の出席はどうやら私だけのようだ。

自分の机に向かうと早速Macを立ち上げる。そうだ、見積書の作成もあった。メールのチェックも兼ねてWindowsのパソコンも立ち上げる。

私は基本的にデザインはMac、文書作成やメール、インターネットはWindowsと使い分けている。

モニター二台の間をしばらくぼーっと見つめる。一瞬ノイズのようなものが目の前を走った気がするが、まあそれは気のせいだろう。

Mac上でIndesign（主にDTP用のデザインツール）を立ち上げる。

オフィス内には私だけ……。ふと私の影の部分が姿を現そうと

する。淫魔……。彼女は私をたぶらかす。私の手は自然とスカートの中に入っていく。下着の上から指で熱くなってきたその箇所をなぞる。下半身がどんどん熱くなっていくのが分かる。

頭がぼーっとしてくる。吐息混じりに快楽に委ねようとするもう一人の私の存在が大きくなってくる。

しかし突然、携帯が鳴った。メールだ。

我に戻った私は少し残念な気持ちを押し殺し、メールをチェックする。なんてことはない、いわゆる「出会い系」のメールだ。つまらない。

拍子抜けた私は仕事に取りかかることにした。先に見積書から済ませてしまおう。

結局、夕方頃に仕事を全て終わることが出来た。小冊子のデザインも明日クライアントに渡せる。これで安心だ。

私はいつも通り今日も定時で帰ることにした。食事……。どうしよう。

夕日が街を鮮やかなオレンジ色に染めている。いつもならウィンドウショッピングをするのだが、今日は早く家路につきたい気持ちでいっぱいだった。特に予定があるわけでもない。

駅を目指して歩く。オフィス街を離れ、繁華街を離れ……。

ふと、目を留めると、古めかしい喫茶店があった。アンティーク風とでもいうのだろうか。何故か私は足を止め、喫茶店を見つめた。

入ってみよう。何故そう思ったのか、私にも分からない。食事を取ることは出来そうにもない雰囲気だ。

店内に入ると、そこは一風変わったアンティーク風の店だった。アジア雑貨、インド雑貨、日本雑貨、よく分からないが中国のものやヨーロッパ風？のようなものもある。統一感が全くない。しかし絶妙なバランスを取っているような店内だった。様々な色が入り交じった空間。普通ならうるさく感じるような色相感だが、その配

色もまた完璧なもののようにも思えた。

雑貨に隠れて少し判別しにくいが、カウンターのようなものがあつた。思わず私は興味深く店内に見入ってしまった。

するとカウンターの奥から声が聞こえた。

「いらつしやいませ」

長い髪を結った白髪の初老の男がいった。この人がこの店のマスターなんだなと直感した。

ジジジッ……。

ノイズのようなものが私の視界に一瞬入ってきたような気がした。疲れているのだろうか。

私はカウンターに備えられた椅子に腰掛けた。

その初老の男の格好は変わっていた。モンゴルの民族衣装のよ  
うなものを着ている。一風変わったようにも見えるがこの空間では、  
まるでこの空間の雑貨の一部であるかのようにも見える。

初老の男は何も言わず、無表情のまま私にカプチーノを出して  
きた。

「私、まだ何も注文してないわよ。ま、確かにカプチーノを注文し  
ようとは考えたけど」

私は驚きを隠せなかった。私はカフェや喫茶店では必ずカプチ  
ーノを注文するのだ。しかも私はこの店に入って数分も経っていな  
い。なぜこのマスターは私にカプチーノを出してきたのだろう。

私はタバコを取り出し、火をつけた。そしてカプチーノに口を  
つけた。その味に私は驚いた。なんと私の好みの仕上がりなのだ。  
それは温度に至るまで私の好みを象徴するかのようなものだった。

「一つお聞かせしましょう。貴女は方舟はこぶね（箱船）というものをご存  
じか？」

マスターは突然言ってきた。驚いたものの私は答えた。

「ええ、少しなら。ノアの方舟よね？ 詳しくは知らないわ」

「そうです。では、その方舟についてお話ししましょう」

マスターもタバコに火をつけた。それはガラムという強いタバ

コだった。独特の匂いがきつい。でも私は決して嫌いではなかった。その匂いは私の好きなシナモンを連想させるから。

そしてマスターはゆっくりと語り出した。いつもの私ならこんなマスターの茶番には付き合わない。でも、この話しは聞かなくてはいいけない、そう思える何か不思議な予感があった。

「ヤハウエ（神）は増え始めた人々の悪行を見かね、洪水で滅ぼすと『神に従う無垢な人』ノアに告げ、方舟の建設を命じたのです。」

ノアとその一家、そして神に従う人や動植物をその洪水から救うためですね。神の慈悲といえるでしょう。ノアと家族八人は一所懸命働き、ノアは伝道して、大洪水が来ることを前もって人々に知らせましたが、悲しいことに耳を傾ける者はいなかったのです。

ノアは方舟を完成させると、家族とその妻子、すべての動物のつがいを方舟に乗せました。洪水は四十日四十夜続き、地上に生きていたものを滅ぼしつくしました。洪水は百五十日の間、地上で勢力を失わなかったのです。その後、方舟はアラト山の上にとまっていたそうです。

四十日のあとノアは鴉カラスを放ちましたが、とまるところがなく帰ってきました。七日後鳩を放すと、鳩はオリーブの葉をくわえて船に戻ってきました。さらに七日経って鳩を放すと、鳩はもう戻ってこなかったそうです。

そのことからノアは水がひいたことを知り、家族と動物たちと共に方舟を出しました。そこで祭壇を築いていけにえを神にささげました。

神はこれに対して、ノアとその息子たちを祝福し、ノアとその息子たちと後の子孫たち、そして地上の全ての肉なるものに対し、全生物を全滅させる大洪水は決して起こさないことを契約しました。そしてその契約の印として、空に虹をかけたそうです。」

マスターは短くなった煙草を消し、新たに煙草を取り出すとマ



ツチで火を付けた。顎髭あごひげを触るのがクセなのだろうか。しきりに触っている。

ノアの方舟の話しはなんとなく知っていただけで、ここまで詳しくは知らなかった。話しとしては興味があるけど、だからと言ってなんなのだろう？ この話しを聞いていると、神は本当に神なのかと疑いたくなってくる。神の名を借りた悪魔なのでは？ と。そもそもなぜマスターはこの話しを私にするのか？ 初対面の相手にいきなりこんな話しをするなんてどうかしてる。では、私は何故黙って聞いているのだろうか。

そして再びマスターは話し始めた。

「以上が大まかな『ノアの方舟』の話しです。これは『旧約聖書』の『創世記（六章 九章）』に記されているものです。

さて、この方舟ですが、旧約聖書が書かれたのは原語のヘブル語が使われていますが、英訳聖書では『ARK』とされています。

ARKとはもちろん『ノアの方舟』を示す言葉ですが、『契約の箱』としても用いられます。それは神との契約書である十戒じっかいが刻まれた石板を収めた聖櫃せいひつことなのです。十戒はプロテスタントとカトリックでは少し違います。

こんな言い方をすると語弊ごへいがあるかと思いますが、極端に言えば、大事な物を納めておく箱の事ですね」

ジジジッ

ノイズが走る。マスターの顔が一瞬ブレたような気がした。

そして尚もマスターは話し続ける。

「その聖櫃、つまりARKですが、これの表面には六芒星ろくぼうせい（ダビデの星）が刻まれています。

ARKは聖なるものですが、選ばれた聖者以外の者が開けると一瞬にして大量の人を死に至らしめる恐るべき破壊力を秘めたものでもあったようです。

またARKという言葉にはいろいろ諸説があります。古代では女性器の隠語としても用いられたという話もあります。聖櫃に刻ま

れた六芒星ですが、　　は男性器、　　を女性器を表したものだとも云われています。

では、先ほどお話したノアの話でお話ししましたが、方舟にはすべての動物のつがいを入れました。このつがいを精子と卵子に例えると……。

そうです。方舟を子宮と解釈することができますのです。仏教でいう胎蔵曼荼羅たいぞうまんだらですが、全体が大日如来の胎内を意味しています。これと同じことが言えるのです。

曼荼羅は宇宙を象徴しています。つまり子宮は小宇宙とも言い換えることが出来るのかも知れません」

マスターは一通り話した、後は自分で考えろ、と言わんばかりの表情でこちらを見ている。

私は……何も考えられなかった。

ジジジッ

ノイズが再び訪れた。白い。それは白いノイズだ。画面が揺れるような感覚。頭がぼーっとしてくる。なんだろう、少しずつ酷くなってるように思える。

分らない。今のこの時は夢なの？　そうだとすればこの不思議な店もマスターも夢の住人？　じゃ、私は寝てるの？

辛うじてカプチーノのほのかな苦さが私を現実に戻してくれる。私は頭を押さえつつ、タバコに火をつけた。

「どうやら……無理のようですね。やはり貴女は選択肢を間違えられたようだ」

マスターが何か言っているが、私には、もう、何も、聞こえない……聞こえている、気も、する、が、理、解、できな、い……私は……だ、れ、な、の。

白いノイズが私の視界を全て奪っていった。意識は辛うじてまだある。

どこからともなく声が聞こえる。女性のような男性のような、よく分からないが聞こえる。

「オトノナイセカイへようこそ」

モーゼの十戒（モーゼの十戒）【wikipediaより引用】

#### プロテスタント

- 一、主が唯一の神であること
- 二、偶像を作つてはならないこと（偶像崇拜の禁止）
- 三、神の名を徒らに取り上げてはならないこと
- 四、安息日を守ること
- 五、父母を敬うこと
- 六、殺人をしてはいけないこと
- 七、姦淫かんいんをしてはいけないこと
- 八、盗んではいけないこと
- 九、偽証してはいけないこと
- 十、隣人の家をむさぼつてはいけないこと

#### カトリック

- 一、わたしのほかに神があつてはならない。
- 二、あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。
- 三、主の日を心にとどめ、これを聖とせよ。
- 四、あなたの父母を敬え。
- 五、殺してはならない。
- 六、姦淫してはならない。
- 七、盗んではならない。
- 八、隣人に関して偽証してはならない。
- 九、隣人の妻を欲してはならない。

十、隣人の財産を欲してはならない。

「序」 第五話：音の無い世界が奏でるのは？

誰もが恐怖する。その無の世界に。

誰もが恐怖する。自分のいない世界に。

誰もが恐怖する。自分が忘れられた世界を。

その女は少し濡れた雨を拭い、バレッタでとめた長い髪をとき、  
ルイ・ヴィトンのバッグを無造作にベッドにほおり投げ、一際大きく存在感のある六十インチのテレビとブルーレイレコーダーと7.1chサラウンドセットとCDプレーヤーとベッドと小さなテーブルと本棚しかないフローリングの部屋を舐めるように見渡し、あな  
たの部屋についていつも退屈ね、と言わないばかりの目で微笑んだ。

男もそれを認めるように笑い、軽い口づけを交わした。その軽い口づけだけで男は完全に平常心を取り戻したが、そんな単純な自分を認めるように女を見つめた。

そしてCDをとめようとするが女は、そのままでもいい、と制し、  
上着を脱ぎベッドの上に転がったままのバッグからヴァージニアスリムを取り出し火をつけた。

メンソールの煙を吐き出した女は男の全身を目だけで一通り見渡すと、嘲笑うでもなくエロティックでもない奇妙な微笑みを見せ、  
つけたばかりのヴァージニアスリムを灰皿に消した。

「ねえ……」

サトミは甘えるような誘惑でもかけるかのような態度を取りながら俺の横にすり寄ってきた。

俺はまだかゆみの取れない目を擦りながらサトミの髪をそつと撫でてやった。

今日のサトミはよく笑うな、ま、俺もそうだがな……。

「コークある？ 無ければこの際ハツパでもいいわ」

両方あるけど俺はいい。

俺は本棚に無造作に置いてあった小さなビニール袋に入ったコカインをサトミにやった。

気分程度にやめておけ。

俺がそう言うのとサトミは舌で唇を濡らし、艶つやがかったその唇を、ワカッテルワヨと動かして見せた。

コカインの袋から白くて綺麗な粉を出し小さな机の上でサトミはクレジットカードでさらに細かく砕き始めた。その白い粉を丁寧に一本の筋にすると、財布からとりだした千円札を巻いて筒にした。俺は思わずおかしくて笑いをこらえた。おいおい千円札はないだろう？

サトミは目を瞑つぶったまま微笑み、ゆっくりとコカインを華から吸った。目を瞑つぶったままサトミは、ああ……と声を漏らしている。少し体がくねり始めている。その淫靡いんぴな動きを俺はじつと見つめる。徐々にコカインが効き始めている。人が薬をやっているところを見るのは虫唾むしずが走る。

ああ、気分が悪くなる。

サトミの口から少し濁った白い涎よだれが出てきた。俺は今日はそれ以上やるなと制しコカインを取り上げた。

まるでタランティーノの映画のようだ。これが映画ならどれだけ、俺は救われるのか……………。

コカインを取り上げた時に見せたサトミの表情は、今までに見

た表情のどれにも似ても似つかなく、俺が今までに見てきたどの人の表情にも属していなかった。

全て悟ったとか、これ以上失う物が無いとか、最高の快樂であるとかそう言ったモノでもなく、それらを合わせた表情でもない、まったく表情がないというような表情をしていた。決してコカインのせいではない。俺は麻薬のせいで変わった人の様々な表情を見てきたから良く分かる。

明らかに異質で奇妙だ。まあ、バッドトリップには違いはないかも知れないがな。

俺はそんな顔をしたサトミを時間を忘れて眺めた。

大した時間ではない。小説を一ページ読むくらいの時間だ。

何もない表情なのに酷くエロティズムを感じさせる。俺は迂闊うかつにも勃起しそうな感覚に見回れ、体が小刻みにプルプルと震えそうになった。それはオルガスムスを連想させ虚脱感をも連想させた。恥を感じ股間を押さえそれに耐えた。

人格。

ふと、頭に横切った。サトミに人格が感じられない。人を形成させる為の格。それが見えてこないのだ。だから……なのだろうか、その顔はマネキンのようにも見える。あの微笑みが美しいサトミは一時的にしても何処へ行ったのだろうか。

俺はサトミの肩に手をやろうとした。

「夢を見たのよ……」

サトミはにこりと笑って言った。

ユメヲミタノヨ……。

女はそう言った。

メランコリックな表情で男を見つめる。あの微笑みは何だったのだろう。恥を感じ始めている男は顔が赤く染まっていく。見つめられているとさらに大きな恥が包み込む。

そんな男から目を放した女はヴァージニアスリムをくわえ、火をつけ煙を深々と吸い込んだ。

「私がシステムに属しているのよ」

女は煙を吐き出し独り言のように言った。

男はモノのような存在で部屋の一部、風景に溶け込んでいった。俺はモノだ。そして女は唯一のモノではなかった。

「誰でもシステムに属しているし、システムに頼りきって安心して  
いるわよね。セックスだって儀式みたいなものだし、ほら、私たちが  
こうして逢っているのもシステムと何ら変わらないわ。そういう  
具体性のあるシステムじゃなくて、無いのよ……その具体性が……」

女はヴァージニアスリムを灰皿に置いた。男は女が何を言おう  
としているのか全く分からずにモノとして聞いていた。

「私ね、知ってる？ いつもアンティークショップに行くのよ。そ  
こでね、本を読むの。なんてことない本。そうね、主に小説かしら。  
カプチーノが好き。ん……いや、そんなことはどうでもいいのよ。  
本当の私なんて、どこにも無い、そう感じる現実から逃れたいだけ  
なのかも知れない。あのアンティークショップが唯一の要？ フフ、  
なんかバカ、みたい。まあ、いいわ」

遠くで誰かが何かを話しているような感覚……。

「システム」と声に出さずに呟いてみるが、モノとして今ここ  
にいる俺にとつてのシステムとは何の意味も持っていないし、すで  
にシステムとの関係を遮断しようとしているのは全くの人格を無視  
している事と何の変わりもない、と男は思う。

そして不意に「人格」と言う言葉が再び脳裏に現れた。人格と  
はなんだ、今のサトミには人格を感じることは出来るが俺自身に感  
じることが出来ない、全てが反転しているのか？ 逆流しているの  
か？ ならばこう考えてるこれは人格じゃないのか？ そう命令さ  
れているのか？

このオンナは誰だ？ サトミ？ それは誰だ？ 俺のオンナ？



サトミ？ 懐かしい響き？

違う。

今の俺に出来る事と言えば脱力感に耐えモノとして聞くことだけだ。

男は少しの動作もすることなく女の反応を待っている。

「具体性のないシステムの中に私はほおり込まれ途方に暮れているの、分かる？ フフ、具体性が無いんだから分かるはず無いわよね。すべてが私を無視しようとし、まるで……そう、まるで霧もやの中で、最早死語となった幻想のようなモノ？ に取り込まれそうになるのよ……。そこには私に無かったモノ、コンプレックスがあつて、私は私を認めようとし無いのよ。」

コンプレックスなんて無いに超したことはないわよね？ というよりも私はコンプレックスなんて知らなかったし、無いものだと思つていたわけ……。なの。勘違いしないでね、別に自分に自信があるつて言うような意味じゃないから。

だから、そう思つてたわけ。言葉だけがってね？ そのコンプレックスが私の人格を……。そう、人格よね。それが私の根底で蠢蠢めいて形成していたのよ。

私はコンプレックスの中で生きていたのよ。でも、それが一体なんなのか分からなかったし恐怖だった。

真つ黒で大きな染みの一部になつて世界の終わりを感ずるような恐怖だったわ。今まで感じた恐怖のどれでもなかったから曖昧なだけだね。

吐き気に似た感覚もあつたわね、セックスの途中で相手があまりにもヘタで腹が立っていつまで経ってもイクことが出来ないような腹立だしさもあつたような気がするわ。愕然がくぜんとしたわね。

でも結局私の中にあつた具体性のないシステムに縛られたコンプレックスの原因は分からなかった」

女はすでにフィルターまで燃えたヴァージニアスリムを消し、新たにもう一本取り出して火をつけ吸い出した。

男はモノを考える。何故自分がモノであるのか、その必要性とは。恥とは。

この女は何をべらべらと話しているんだ。今、俺はモノだ。

「分からないままじゃ駄目なのよ。私が誰かなんていいの。ただ理解したいのよ」

情報を得なければならぬ。モノでは駄目だ。依存の根底を見つけたし、破壊だ。

「外側でダンスステップを踏んでいるのよ。乾いた空気と澱んだ空気の中で優しく踊っているの。でもね、でもね……だから、その……楽しんでるわけじゃなくて、相手もいないし、鏡、そんな感じなの。そして誰でもない私に、私が私を売り渡したのよ」

女はそこまで言うとお嘔吐おうとに苦しみだした。あまりいい物じゃなかったからな、男にとっては自分がモノであると言う事実の方が苦痛だ。

恐怖？ 何を言う。今、俺を支えているのは目のかゆみだけだ。

「気分が悪いわ……」

女の顔色が青ざめてきている。しかし再び口は開いた。何かが男の中で弾けようとする。まるで柘榴ざくろのように……。

「利己的じゃないわ。私は怖いよ。売り渡したことを後悔してるの。売り渡したくなかったのに……。でも、私は鏡を見るようにダンスステップを踏んで具体化を計ろうとしているのよ」

依存するな、依存するんじゃない。

依存するな、依存するんじゃない。

依存するな、依存するんじゃない。

「そうやって、鏡を見るように……砂漠を彷徨うように……自分と向き合ってたことが一つだけあるのよ」

そう言つて女は男を見つめた。

その柔らかく滑らかで暖かな視線は青ざめた表情と共に男を恐怖する。この女、救いを求めている。男はその時初めて何故自分がモノであつたかを理解した。

危険だ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あなたのことよ……」

そう言つと女は男にキスをした。二人の舌はお互いの粘膜をすべて取り除くかのように激しく絡み合った。しばらくの間二人は長く口づけを交わしていたが、それを止めたのは男の方だった。

いつしか雨の音は消え、もうすでに音楽は止まっていた。静寂が時を止めるような感覚が襲う。

「あなたが必要な……」

穏やかな表情を作った男は女の胸や陰部に手をやる。女は少し悶えながら甘い吐息を吐いている。柔らかなモノはいつもすばらしい……。男は女を脱がし体中をゆっくりとゆっくりと堪能していた。

なぜ！ 俺は！ このオンナを抱くのだ！？

ローリング・ストーンズのバラードが静かに流れ、窓からは薄日が射そうとしている。窓から微妙な風が入って、全てを浄化させていく。部屋はもう微かな青が闇を殺し始めている。ベッドの中で寝息を立て女は静かに眠っている。

男は手にナイフを持って「サトミ」の寝顔を静かに微笑みながら見ている。

柔らかい……。見ろよ？ こんなに柔らかでなめらかなんだぜ

……。

ナイフは女の胸に突き刺さる。鮮血はベッドのシーツを紅く染め、床をまるでキャンバスのように塗り変えていく。命の色をしたその液体は命を消す瞬間こそが美しい。

男は目を擦る。目のかゆみは取れた。いい朝だ。

「おはよう………………。見ろよサトミ、音のない世界だ」

ジジ…………ジジ…………ジ…………

2008年××月××日。

その日の夕刊にとある事件が報じられた。

「××署は××日、交際相手を刺殺したとして、××都××区、デザイナー、宮下真人容疑者（32）を殺人容疑で緊急逮捕した。刺したことを認めているという。」

調べでは、宮下容疑者は同日午前6時すぎ、××都××区、交際相手の崎山聡美さん（30）の自宅マンションで、ナイフで崎山さんの胸を刺して殺害した疑い。

崎山さんは数ヶ月前から仕事を通じて知り合った宮下容疑者と交際していた。午前1時ごろ、崎山さんが宮下容疑者の部屋を訪ねた。

宮下容疑者は黙秘を通しており、事件の全貌は分かっていない。調べでは午前7時すぎ、宮下容疑者が「人を刺した。自分でも

何故か分からない」と自ら通報したことにより事件が発覚。午前7時すぎ、捜査員が現場に踏み込んだところ、ベッドでナイフを刺された状態の崎山さんを発見。すでに死亡していた。同時に、テラスで放心状態の宮下容疑者を確保した。

今後××署は宮下容疑者に追及する方針」

「序」 第六話：裏

気づくか、気づかないか。

その差は凄く大きい。

私は今、岐路に立っている。

大きな分かれ道。

どちらに進んでもイバラの道。

選択すべき時。

気づけ……………。気づけ……………。

まだ選択が出来るはずだ。

さらなるイバラの道。

それは新たな道を作ること。

音の無い世界

誰もが恐怖する。その無の世界に。

誰もが恐怖する。自分のいない世界に。

誰もが恐怖する。もう一つの世界の可能性を。

第六話 「第五話 裏 最悪の裏にはさらなる最悪があることに誰も気づいていなかった」

その女は少し濡れた雨を拭い、ゴム紐でとめた長い髪をとき、一際大きく存在感のある六十インチのテレビとブルーレイレコーダーと7・inchサウンドセットとCDプレーヤーとベッドと小さなテーブルと本棚しかないフロアリングの部屋を舐めるように見渡し、あなたの部屋っていつも退屈ね、と言わないばかりの目で微笑んだ。

男もそれを認めるように笑い、軽い口づけを交わした。その軽い口づけだけで男は完全に平常心を取り戻したが、そんな単純な自分を認めるように女を見つめた。

そしてCDをとめようとするが女は、そのままいい、と制し、上着を脱いだ。

仕事帰りのせいだろうか、ブラウスを着たままのようだが、少し前の方も雨で濡れているようだ。そして女は一瞬はつと何かを思いだしたかのような表情を浮かべると、「煙草ちようだいよ」と一言漏らした。男は無言でラッキーストライクを一本差し出した。「相変わらず男臭い煙草よね」と女は小さな声で呟き、男は苦笑いを浮かべた。女はそのままベッドの上に座り、煙草を口にくわえ、火をつけてと男に促した。

「カバンすら忘れるなんてどうかしてるよね」  
と、無表情のまま呟く。

煙を吐き出した女は男の全身を目だけで一通り見渡すと、嘲笑うでもなくエロティックでもない奇妙な微笑みを見せ、つけたばかりの煙草を灰皿に消した。

「ねえ……」

サトミは甘えるような誘惑でもかけるかのような態度を取りながら俺の横にすり寄ってきた。

俺はまだかゆみの取れない目を擦りながらサトミの髪をそっと撫でてやった。

だが、俺の不安は目のかゆみと同じく無くならない。サトミの行動が分からない。

いつもと同じ時間を過ごすはずだった今日が、非日常のように思える。自分の部屋なのに、見知らぬ部屋のような錯覚に陥る。

明らかに不自然だ。髪をいつものように撫で<sup>な</sup>たが、サトミの態度が少し不自然だった。オマケにカバンを忘れるなんてどうかしている。（それは本人も認めている）

この微笑みにしてもなんだというのだ？

「コークある？ 無ければこの際ハツパでもいいわ」

今日は何もない。俺はそう言った。本当はあるが、不自然なサトミに与えるべきものではないと判断したからだ。

サトミは舌で唇を濡らし、艶がかったその唇を、ナイナライイワと動かして見せた。

その表情には感情が何も見えなかった。

.....

少なくとも1時間は経ったであろうか。



俺もサトミも何も話さず、重い空気だけがそこにあった。

何もない表情なのに酷くエロティズムを感じさせる。俺は迂闊うかつにも勃起しそうな感覚に見回れ、体が小刻みにプルプルと震えそうになった。それはオルガスムスを連想させ虚脱感きよだつをも連想させた。恥を感じ股間を押さえそれに耐えた。

俺は恥ずかしさを隠すかのように、サトミを後ろからゆっくりと抱きしめた。そしてそのまま俺の手はサトミの胸へと手をやる。俺の手はそのままブラウスのボタンを上から、一つ、二つと外していく。後ろからではサトミの表情は分からない。物動じない彼女の気配から表情が伺えないことが分かる。しかし俺の手の動きは止まらない。三つ目のボタンを外したところで、俺の手はブラジャーの中に入っていく。柔らかい感覚が俺の下半身に直撃していく。俺の右手はサトミの右胸をゆっくりともみ上げていく。あえて乳首に触れない。俺の手が動く度、サトミの体が少し揺れる。そして俺の左手はサトミのスカートの中に入っていく。すぐに下着の中に手を入れる。

人格。

ふと、頭に横切った。サトミに人格が感じられない。人を形成させる為の格。それが見えてこないのだ。だから、その顔はマネキンのようにも見える。あの微笑みが美しいサトミは一時的にしても何処へ行ったのだらう。

俺は左手を下着の中から取りだし、右手も胸を触るのをやめ、サトミの肩に手をやろうとした。

「夢を見たのよ……」

サトミは振り返り、軽く俺の唇に触れるか触れないくらいのキスをすると微笑みを浮かべながら笑って言った。そしてその微笑みには「微笑み」が無かった。

ユメヲミタノヨ……

「アナタと初めて会ったあの日、あの夜のこと。覚えてる？」

サトミは遠い目をしながら聞いてきた。あの日？ あの夜？  
そういえば、何故か記憶が曖昧だ。

「ああ、もちろんだよ」

覚えてるいると言えば、覚えている。だが、何か靄がかった記憶で、うまく思い出せない。

「もちろんって？」

サトミは相変わらず遠い目、というより、焦点があっていない表情で俺に問う。

「何故そんなことを聞く？」

俺は答えるのをためらった訳ではない、サトミの質問の意図が見えてこない。「不用意に答えてはいけない」俺の本能がそう言ってる気がした。

「あの日、あの夜……」

サトミは何も表情を変えずに呟いている。何かがおかしい。

ジジジ……ジジジ……

サトミはベッドの上で、裸のまま動かない。その胸にはナイフが刺さって、血が流れ、ベッドのシーツを赤く染めている。

ジジッ……

なんだ！？俺までおかしくなってきたのか？脳裏にサトミの死体が過ぎる。いや、見たようにも感じる。錯覚？妄想？いや、そのような類たぐいのものじゃない。それはあり得ない。現実……だ。分らないが、現実のことにしか思えない。では一体なんだというのだ。

サトミは俺の隣にいる、間違いない。時折襲うノイズのせい？目のかゆみのせい？

違う……！！！！！！！！！！

俺は目の前のテーブルに置いてある、ガラスの灰皿をテレビに投げつけた。ガラスの割れる音、鈍い音、よく分からない音が入り交じる。

「あの日、あの夜……あの日、あの夜……あの日、あの夜……」  
サトミは繰り返し呟いたままだ。それはサトミの形をした人形のようにもあつた。

「ぐおおおおおおお！」  
叫ばずにいられない。

「あの日、あの夜……あの日、あの夜……あの日、あの夜……あの日、あの夜……あの夜……あの夜……あの日の夜の日の……あの夜の夜の……」

カタカタカタカタカタカタ……

否定……そうだ、否定しなくてはならない。俺が俺である証明をしなくてはならない。

「耳が痛い……」

サトミが突然言った。ふいに現実。その一言で俺は我を取り戻した。テレビも壊れていない、灰皿も目の前にある。俺は夢を見ていたのか？いや、さっきのも現実……だと思う。現実の交差、そう言えはいいのだろうか。結論の出るようなものではないのは確かだよ。

俺は煙草に火をつけ、少し落ち着かせることにした。出来れば

さっきの体験をなかったことにしたかった。

「耳？ その前にちよつと聞かせてくれ。今、俺何かしてたか？」

無駄だとは思ったが、聞かずにいられなかった。

「特に何も？ 目を擦ったくらいでしょ？」

あなた、何を言ってるの？ と言いたげな口調でサトミは答えた。「なら、いいんだ」と俺は言った。夢でもない、現実でもない。だとするとなんだ？

ちよつと待て。「目を擦った」だと？ 俺はそんなことをした覚えは無い。無意識なのか？

「それで、耳がどうした？」

「耳がイタイのよ。奥の方がズキズキするというか」

耳？ 違和感を感じる。なんだこの違和感は。

「酷くイタイ時もあるんだけど……特に何があった訳でもないの。今はそんなに痛くない」

ジジッ……………

一瞬、サトミがブレたように見えた。今日の俺は明らかにおかしい。いや、サトミが来てから……………そんな気がする。何故か身の危険を感じる。何故だ。

「あなたは大丈夫？」

一瞬、サトミの目が生きたように見えた、無表情のまま話すサトミの表情が一瞬戻った気がした。いつものサトミ。俺の愛したサトミ。

「俺は問題ない。それであの日がどうした？」

問題無い。とは言ったが、何か「耳」の話しを聞いてから、「耳」に違和感を感じる。まるで自分のモノではないような。「音」が何かのフィルターを通して聞こえてくるような。そんな違和感。薄い壁に耳をつけて、向こうの部屋の音を聞くような感覚。「今日」という違和感を比べたら、そんなに大したことではない。

「『あなたと出会った日』があるのは当たり前のこと。それが夜だったと私は記憶している。でもね、何か靄がかってはいっきりと思

出せないの。それどころか、今日ここへ来る時、私は『ある重大な決意』をしてここに来たの。でも、それがなんなのかすら思い出せない……」

## 暗転

2008年××月××日。

その日の夕刊にとある事件が報じられた。

『××署は××日、××都××区、デザイナー、宮下真人容疑者（32）と××都××区、交際相手の崎山聡美さん（30）が崎山さんの自宅マンションで、死亡しているのを発見したと発表した。

崎山さんが会社に出勤せず、連絡も無いことを不振に思った会社側が警察に通報。××署員が崎山さん宅を訪ねたところ、宮下さんと崎山さんの遺体を発見した。

死因は両者ともに耳からの出血が酷く、出血多量での死亡と思われる。直接的な死因は現在分かっていない。争った様子もなく、自殺の可能性も低いことから、事件性が高いとして、××署は捜査中』

「序」 第七話「創造と想像」

音の無い世界

誰もが恐怖する。その無の世界に。

誰もが恐怖する。自分のいない世界に。

誰もが恐怖する。作られた自分に。

第七話 「創造と想像」

真っ白な空間……。

そこは「何も無い」と思えるような空間。

それが何なのかすら想像出来ないとも思えるような場所。  
全てが曖昧で、全てが説明できない空間。

そんな場所、いや、空間に初老の男が唯一の存在であるかの如く、そこにいた。

「ほほう。ついにあなたはここまで来られましたな」

初老の男は言う。

「あなたは想像出来ますか？」

全てを見透かすかのように、話しを続けてくる。

「『想像は時として、創造するものである』この意味にそろそろあなたは気づき始めているのです」

淡々と話す、初老。

イメージしてください。

初老をイメージしてください。

あなたの思う、初老をイメージしてください。

「理解出来ましたかな？」

初老はあなたに問いかけています。

「いいでしょう。ここで一つの『答え』を教えて差し上げましょう」  
初老がヒントをくれるようです。

「『真つ白』とはキャンバスのようなもの。言い方を変えれば『紙』です。そこに何かが足されていくのです。それは何でしょうな？」

A：絵

B：文章

「『A』なのか『B』なのか、その答えに意味はありません。あなた自身が選ぶ。それだけなのです」

しばしの沈黙

「二つの道があるとしましょう。どちらの道を行かれますかな？」

目の前に、看板がある。

右ルート：先には崖があります

左ルート：先には大きな川があります

「さあ、この物語の行く末を見守るもよし、ここで下車するもよし・  
・」

ここで少しの間を置いて。

「今こそ、物語は真実に向かって動きだします。あなたには選択して頂きたい」

A：続きを読む

B：やめる

「『A』を選択されたあなた。もう少しお付き合いを……………」

初老は立ち去ろうとしています。

初老が何かを言おうとしています。

「言い忘れていました。よく目を凝らして、ご覧なさい。別の道が見えるやもしれません」

初老は立ち去りました。



お待たせいたしました。当船は出航いたします。

## 「始1」 第巻話：信孝1

暑い日は続く。

ささきのぶたか

佐々木信孝の部屋は暗く闇に覆われていた。陰気くさい、そう表現できるような雰囲気立ちこめている。

気づけばもうセミの声が聞こえる。いつの間にかもう夏なんだな。この部屋はいつもエアコンを効かせてるから、季節感がいまいちよく分らない。日付を確認するとすでに八月に入っていたようだ。我ながら季節感の無い生活に苦笑する。

カーテンも完全に閉めきっているので、昼なのか夜なのかさえ判断しづらい。時計が狂っていれば、本当に昼夜が分からなくなってくる。

窓が小さいからカーテンを閉めるだけで部屋は真っ暗になる。オマケに部屋は電灯すら消した状態なので、昼でも真っ暗だ。この部屋主の信孝以外なら何処に何があるのかすら分らないだろう。

時折、エアコンの風で揺れるカーテンの隙間から一瞬差す光が昼夜の判断を助けてくれる。だが、それすら煩わしい。

信孝がいわゆるニートを始めてから、恐らく数年経つが、実際どれくらいやってるかは本人にもよく分らない。確か今は二十三歳になっていたはずだ。それくらいもう感覚が麻痺している。長いこの生活ですっかり太ってしまった。いわゆる「デブ」まではいかないにしても、十分にメタボリック症候群には違いないだろう。どうも最近は何の節々も痛む気がする。

ニートというと、部屋から全く出ないイメージを誰もが持つんだろうけど、俺はたまにだけ外に出る。トモダチだっている、つもりだ。他のニートと一緒にされたらたまらない。

信孝は絶えず付けっぱなしのパソコンのモニターをぼーっと眺めながら、そう考えていた。終始爪を噛んでいることに本人は気づ

かず、理由の付け所がない理不尽な苛立ちを覚えるのは何故だろうか、と考えている。「変わりたい」と願うだけの生活。

数年前から、あくまで恐らくだが信孝は「鬱病<sup>うつびょう</sup>」になっていた。自覚症状はある。何度かネットで「鬱病」について調べたことがあったが、その症例と自分が酷似していることに気づいていた。専門医にかかって検査した訳では無いが間違いないだろう。

コンコン。

ドアをノックする音が聞こえる。

またあの女か… 「ちっ」と自然に出る舌打ちと共に一瞬の殺意を覚えるが、ぐっところえる。そして信孝はそれが当たり前のように無視する。

コンコン。

再びノックがする。苛立ちがさらに自分の中で大きくなっているのがよく分かる。

「信孝… ちょっと話しましょう。母さんあなたのことが心配なのよ」

おまえに俺の何が分かるんだ？ 話しようだと？ 俺は話すことなんて無い。顔を合わせるのも嫌だ。ウザいんだよ。再び殺意が信孝の中で暴れようとする。

「うるせえよ！」

思わず出た罵声と共に目の前にあった漫画雑誌をドアに投げつけた。もはや自分の行動に何の意味も無いことを信孝自身もよく分かっていた。

ふと思うことがある。何故素直になれないのか。何故怒りが出るのか。しかしいつもその答えは出ない。

「……母さんね、離婚決めたから」

母親はそう告げると、一階へ下りていったようだ。

もはや涙の涸れ果てた母親の無気力なその言葉には、何かしら諦めのような意志がドア越しからでも感じられた。



から麻薬反応が出たから再逮捕。要略すればそんな感じだ。よくある話だし今更驚くようなものでもない。

「大した事件でもないし、つまんねえな」

思わず口に出てしまう。

最近は大変なニュースが多いし、特別変わった事件でも無い限り、記憶に残らない。この事件自体もすでに風化しているようにしか見えない。

しかし「つまらない」と思ったことには変わらないが、なんとなく気になった俺は、再び某掲示板から該当するスレッドを探した。少し下がった状態ではあったが、すぐに見つかった。やはり以前ほどのレスの量はなく、内容も冷めたものばかりだった。

「15：そーいやそんな事件あったな」

「33：ヤクの所持なんて初動捜査で見つかったんだろ？ やっぱ

警察無能だな」

「35：聡美たん、ハアハア」

「37：<<35氏ね」

「42：密かに宮下デザイン好きだったんだけどな」

「51：税金の無駄だな」

「63：<<42俺もそうだね。アンシンメトリーがいいんだよね。最近はやラデザもやり始めてたみたいだし、これからだったのになorz」

「72：また一つクソデザが世から消えたwww」

どうでもいいような内容ばかりの書き込みが目立つが、意外と擁護者もいることに少し驚いた。少なからずファンもいるようだ。そもそもこの宮下が何のデザインをしていたのかもよく分からないのだが。

以前より書き込み量は少ないものの、スレッドが立ってから3時間で150件の書き込みがあった。勢いとしてはそこそこあるが、

どちらにしてもすぐに忘れられるんだろう。

そんな中、一つ気になるレスを見つけたことが出来た。こんな掃きだめのような掲示板の中に気になる書き込み。

何故それが気になったのか、俺はその時まだ何も気づいていなかった。

『99：彼はオトノナイセカイの住人になっちゃったんだよ』

## 「始2」 第貳話：弥生子1

「イマドキの女子高生」とは思えないほどのシンプルな部屋。部屋の半分を陣取るベッドの上で、いつものように寝る前も携帯電話をいじる。お気に入りのピンクのクマのぬいぐるみを股に挟んでいるのは、物心ついた頃からのクセだ。

黒沢弥生子くろさわやえこことヤエは今夜も同じ学校の友達、と呼ぶべき存在かどうかまでは分らないが、特に意味の無いメールのやりとりをアヤとしていた。「今日何食べた？」とか「何してる？」とかそういう下らない内容だ。

『また明日のテストウザくね？』

こんなメールがアヤから携帯に届く。

わざわざ同調を求めて来られても困る。「愚痴ってくるオマエもウザイ」と打ちかけるが、暇つぶしの相手がなくなるのは、ツマラナイ。ヤエはそう考えると、打つのをやめることにした。自分はアヤより上でありたい。そう無意識に思っているのかも知れない。

同調の返信をしておく。

『うん、ウザい』

するとすぐに返信がくる。

『ちよつとさつきから相づちだけじゃんよ（；；）』

メンドー。「オマエがつまらないから大した返事出来ないんだよ」とヤエはまた返信しそうになるが、やめて携帯を閉じた。

アヤはイヤなヤツでもないけど、好きなヤツでもない。たまたま同じ学校に通って、たまたま同じ教室にいるだけの同級生。共に下らない高校生活で『青春』を送るだけの付き合い。我ながら『青春』とかアホらしいことを考えちゃったな、とヤエは眉をいじる。

再び携帯が振動する。

最近の携帯の音が鬱陶しくて、バイブだけにしている。いわゆるマナーモード。着うた流したりするなんてどうかしてる。今時そ

んなヤツ勘違いしたおっさんとかおばさんしかいないんじゃない？  
とヤエは思う。

眉をいじることに熱が入り始め、携帯を開けることも億劫にな  
つてくると、さらにイヤなことを思い出した。

#### 夏期補習期間。

テストで赤点を取った者だけが夏休み期間中の数日間の補習に  
出なくてはいけない。

オマケに明日は補習最終日でそれ自体は有難いが、テストが待  
っている。非常に不愉快だ。

ま、アタシには勉強なんて必要無いから、何もしないけど。補  
習を受けること自体が本当にウザくてヤダ。どうせアタシには勉強  
なんて必要無い。大学に行くつもりなんてないし、結婚するまでは  
家事手伝いという名目も出来る。ほどほどにバイトして、テキスト  
に男作って……。あー、なんか人生どうでもいい。

ヤエは「はあ……」と溜息をつきながら、面倒ながらも携帯を  
開いた。

『どうでもいいけどお、暑いよねえ』

どうでも良いなら、言うな。暑いのはオマエだけじゃない。

ああ、今日のアタシ駄目だ。何に対しても悪態ついちゃう。暑  
いのにも関わらずエアコン壊れちゃってるし。オマケに生理二日目  
だし。もう今日はほつといて欲しい。でも言えない……。

ウザいけど返信することにした。

時間はまだ23時。いつも寝るのは1時だからまだまだ時間は  
ある。だからと言って当然勉強する気も無い。この時間は面白いテ  
レビもやってないし、そもそもテレビがつまんない。ネットをやる  
うにもアニキにいちいちパソコンを貸してと言うのもメンドクサイ。  
結局、今のヤエにとって、アヤとのメールをして暇を潰すしか  
することが無いのだ。

『あつつう！　うち今エアコン壊れてんだよね（ノ、）シクシ



ク  
『

どうでも良い内容にはどうでも良い内容で返す。

『まつじい？ それってマジ大変じゃん（＜ ＞ノ）ノ』

さらにどうでも良い返信がすかさず来る。アヤも相当暇なのだろう。アタシも同じ猪（むじな）といふことが、とヤエは思わず苦笑する。

『暑くて暑くて死んじゃう』（―― ドテッ』

いつまでこんなやりとりをすればいいのか……。我ながら呆れる。

『ホント死んじゃうよね。ケータイの電波悪いなあ？ なんかなあ？』

アヤも相変わらず、つまらないメールの返信を返してくる。

『まつじい？ じゃえんじゃえんそんな感じしないけど？ アヤ返信早いじゃん（。・x・）ゝ』

本当に呆れてきた。どうでも良い内容にどうでも良い内容で返すアタシ。アタシ自身にも呆れてきた。

もうこれ以上続けらんない。出会い系サイトにでも書き込んでみようかな。暇な状況となんかイライラする「今」をかえたい。生理のことはこの際忘れてしまおうか……。でも、それはなんかヤダな……。あー、なんかキモいね、アタシ。

すでにヤエは麻痺していた。たかがメールのやりとり。しかしそれは大きな悪意にも似た魔（間）が人を不安にするのだ。

珍しくアヤからの返信が遅い。

いつの間にか返信を待つ立場になっている気がする。携帯電話って本当にどうなんだろう。便利だし確かに持ってないとかあり得ない。でも、いつも受け身。携帯電話はアタシの都合を考えてくれない。

ヤエは落ち着きを失っている。気づけば「メールの返信をじつと待っている」のだ。世間ではこれを依存症と呼ぶ。しかしそれはヤエも自覚していることだ。

眉をいじるのを再開しようかと思った時、少しタイミングが遅れて、アヤからの返信がきた。そのことにヤエは安堵感を覚えるが、一瞬でそれは違っていると再確認する。認めたくないのだ。なんでアタシがアヤのメールを待たなきゃなんないんだよ……。そう言い聞かす。

『まーいいやー。話し変わんだけどお　おk?』

ん?　状況が変わった。

少し何か違和感を覚える。ちよつと一瞬寒気がしたような、そんな違和感。何がどう違和感があるのかまでは分からない。そういえば、中学の頃も同じような違和感を感じたことがある。あの時は……ま、いいや。とにかく返信しよう。

『おkだよ　ナニナニどーしたのお?』

興味を持ってしまった、アタシ。ヤエは何かもう逃げられないような気が一瞬した。

1分、2分、3分…もうすでに5分が過ぎた。たかが5分。しかしアタシら女子高生には十分すぎる長い時間。

「10分ルール」というものがある。10分以内にメールの返事をしないヤツはハミられる。それがアタシらのルール。ひよつとしたら10分を超えるかも知れない。

流石にアタシは心配になってきた。何かトラブった?　急いで電話をかけようと、電話帳(携帯の)からアヤの番号を探し出した。そしてかけようとしたとき、一件のメールが届いた。

ドキッと一瞬したが、そのメールはなんてことのないもの。出会い系の宣伝のメール。恐らく業者かサクラのメール。内容は下らない。そもそもアタシは女だ。

一瞬緊張の糸が途切れた気がした。

ベッドに寝っ転がりながら、ベッドの下に隠しているレディー・スコミツクを取り出す。意味もなくページをめくり出す。それでも何か落ち着かない気がした。

しかし。バイブは再び鳴り始めた。

ブーブーブーブーブー……

慌てて、メールを開いた。もちろんそれはアヤからだった。

『オトノナイセカイのウワサ知ってる？』

### 「始3」 第参話：ヨネ1

すでに時間は夜中の二時を指していた。

渋谷のとあるビルの地下にBARがある。とりわけ特別有名でもないその店に男が一人。

平日のこの日はいつもより客足も悪い。

夏に入り気づけばもう八月。温暖化のせいだろうか、例年以上のこの暑さはたまらない。元々客の入りは悪いが特に今日は酷いものだ。

店の名前は「Lanthan ein」。ギリシャ語で「隠れる」の意味があるそうだ。英語でいうところの「Lantern」。いわゆるランプのことのようだ。これまた渋谷の雰囲気とはまた似合わない。一見するとドイツ辺りの街並みに似合いそうだ。

オーナーはいわゆる土地成金で富を築いた運だけで生きているような男だ。この店にしても自分がゆつくり飲みたいだけの為に作ったそうだ。自分さえ飲めればいい、時々女を連れてくる隠れ家としても使える。それだけの為に作ったと聞かされている。

渋谷を選んだ理由にしても土地を転がしたついでと言っても差し支えないほどで、当の本人にしてみれば、どこでもよかった訳だ。しかし成金がオーナーの割には以外とセンスの良い店。と陰でよく言われる。成金がセンス悪いとは言わないが、その傾向があるのには違いないだろう。シンプルでありながら飽きさせない造り。恐らく良い建築デザイナーを使つたに違いない。

オーナーはそれほど頻繁に姿を現さないようだ。「何の為に作つたんだ？」と誰もが思うという。

カウンターの中心に一人、ヨネはグラスを磨きながら、ぽつりと呟いた。

「俺は……本当に情けないヤツだ……」

半年前に上京してきたヨネはヤマザキという男と知り合った。

たまたま入ったこのBARで知り合った。たまたまというのはある意味語弊かも知れない。ヨネは自分の目指すもののために数々のBARを渡り歩いた。有名店から評判の悪い店、隠れた名店。

ヤマザキと出会ったこのBARはとりわけ有名でもなく、流行っているような店でも無かった。全てが「普通」。しかしその普通こそが難しい。それはある意味全てのバランスが調和されていた空間だった。カウンターに三人。座った席の隣が、ヤマザキだった。

もうかなり前の出来事のように感じる。今もこうしてこの「Lanthanein」でバーテンを出来るのも全てはヤマザキのおかげだ。

今に満足はしない。しかし半年前と比べるとヨネの心境もかなり変わって落ち着いてきた。だからと言って全てがうまくいっている訳でもない。

ただ、環境が変わったこと、今の自分にあった「居場所」を見つけることが出来たということにはそれなりに満足していた。もちろんそれはヤマザキに与えられたものだから、本当の意味での居場所では無いのかも知れない。

半年前、ヨネはバーテンダーとしての誇りをいつも持っていた。仕事もそこそ順調で自分の技術が周囲に認められはじめていた。しかしその周囲の反応も空しく、当の本人は悩みを抱えていた。周りには決してそれを見せない。決してそれが美学だと考える訳ではないが、それはヨネ、米田祐希よね だゆうきとしてのプライドであった。

「もう俺は限界なのかもしれない」

技術的にある程度まで来た。だが、それ以上を目指す本人にとって、これほど壁を感じることはなかった。所詮は井の中の蛙かわず。俺は何も知らない。

「ヨネはいつもそうやって自分の殻に閉じこもるのね。周りに悟られないように、いつも周りに合わせてる」

ヨネが姉と慕う女性からの痛烈な一言だった。

ヨネは昔から一際目立つ存在だった。良くも悪くも周りにアピールする、自己主張の強い人間だった。しかし周りからは冷めた目で見られることも多く、空回りしていることが多かった。

本人もそれを自覚していたようだが、それでもその立ち振る舞いをやめることはなかった。仲の良い連中にはウケが良かったのかも知れない。ヨネ自身、他の連中はどうでも良くて、自分が心を許せる人間だけが自分を分かってくれればいい、いつもそう思っていた。いや、本当はただ藻掻いていただけなのかも知れない。

高校の頃、いつも一緒にいた仲間がいた。仲間と一緒にいるのは楽しかった。恋愛のこと、学校のこと、社会のこと、心のこと、下らないこと。なんでも話した。

ある日、女友達の前で号泣したことがあった。俺を黙って抱きしめてくれた。

俺が俺であるために俺は立ち向かわなければならない。

どこかの誰かが歌ったあの歌のように俺は生きていたかった。

しかしそれはプレッシャーとなり、強くなったつもりでいた俺を押しつぶそうとした。

しかしあの子は俺に言った。「大丈夫だよ」と。

他の仲間もその場にいた。それに同調するかのように。彼らはそっと見守っていた。かけがえの無い友。俺は独りじゃないんだ。

俺は生まれ変わったような感覚を得た。しかしだからといってその日から何かが変わった訳では無かった。俺はみんなに迷惑をかけているのではないだろうか。

いつも本心を語ることを邪魔をしていたのは他でもない、自分だった。

そう、あのヒトが言うように、ヨネは自分の殻を打ち破ることは出来なかったのだ。

ユメ。ユメを語ったあの時代。ユメを追いかけた。あの頃、あの時、あの記憶。

俺はいつまで足踏みをしているのだろう。踏み出せないもどかしさ。いつまで経っても俺はこの「場所」から動けない。

「無理に動く必要なんてあるの？」

「踏み出してどうなるの？ その先にあなたの『ユメ』が本当にあるの？」

「あなたの『したいこと』ってその『ユメ』なの？」

夢で言われたアナタの言葉。俺は何も答えられない。

「ふんっ。夢の中で言われた？ 甘えるな。それは言われたんじゃないよ。自問自答だ」

はははっ。アイツならそういうだろうな。そうだな。俺は「怖い」んだ。進んだ先、そこにあるものが怖い。

「甘え」か。それも含めて認めなくちゃいけないのは分かっている。ひょっとしたら俺は誰かに認めて貰いたいのかも知れない。それが誰なのか、あのヒトなのかアイツなのか。それとも。

気づいたとき、俺は地元を離れる決意を固め、誰にも告げずに街にやってきた。

店の入り口のドアがゆっくりと開いた。客のようだ。

「いらっしやいます」

グラスを磨きながら客の顔を見ずに言った。見るまでも無いヤマザキだ。

「ヨネ、仕事はどうだ？ 順調か？」

ヤマザキはカウンターの一番端に座ると、煙草をくわえ、火を付けながら言った。「俺自身はそれなりに。店はご覧の通り」と俺は答えた。そのやりとりに互いが苦笑いする。

「オマエさ、自分の店を持ちたいとか言ってたな。今はまだ無理だろうが、俺が店の名前を付けてやる。この名前をやるよ。『maverick』。どうだ、一匹狼を気取ってるオマエにぴったりの名

「だろ？」

そう、俺のユメ。いや、ユメなんかで終わらせるか。俺の現実にしてやる。

「ありがとうございます。ヤマザキさんには何もかもお世話になりっぱなしですね。その名前気に入りましたよ。でも、使うのはまだまだ先になりそう……やなあ……」

少し笑いながら感謝を示し、俺はそう答えた。俺の目標。それは紛れもない俺の言葉だ。

そしてヤマザキは「話は変わるが……」と真剣な眼差しを向けてきた。

「オトノナイセカイの話聞いたことあるか？」



#### 「始4」 第四話：冬哉1

父が死んだ。

それはもう十年前の夏だった。丁度、今頃の季節。暑い日が続き、当時の最高気温を記録した、とテレビの淡々としたニュースを臍氣に記憶している。湿気が酷く雨が降り始めた頃のことだった。

八月八日。この日が父の命日。すなわち、今日だ。

お盆を待つことなく俺たち家族はいつもこの日に墓参りに来る。お袋と妹の三人。いつまでこの三人で親父の前に来ることが出来るのだろうか。

「なあ、親父。俺もう二十三になったんだ。来年はひょっとしたら四人で来るかも知れないよ。再来年は五人だったりしてな？」

俺は数珠を持った両手を合わせ、心の中で親父に話していた。親父がこの報告を喜んでくれるかどうかは分からない。まあ、あの親父のことだ。普通に喜ぶとは思う。

過去がどうであれ、この年になって、自分が家族を持つかも知れない状況に立った今、なんとなくだが親父のことが分かった気がした。

命日を迎える度に思い出す。小さかった頃のことを。そう俺が幼少の頃のこと。全てが楽しく輝いていたあの頃を。

黒沢冬哉くろさわふゆは自分の父親の墓前で、まるで父親と話すかのように、少ししゃがみ込んだ。

その頃の俺は父を「凄い、なんでも出来る、何でも知ってる、世界で一番強い」そう思っていたような気がする。

父親は常に子供に対してそう思わせなければならぬ、それが父親というものだ。臭い言い方をすれば「男は背中で語る」。その象徴が父親だったと思う。

俺もまたそれを信じていた。しかしそれは裏切られることとなる。いや、気づいたと言うべきなのだろう。

当時、俺は中学生で思春期真っ盛りの頃だった。思春期がそうさせたのだろうか、俺は父が嫌いだった。顔を見る事すら嫌で話す事も拒んだ。とにかく嫌で仕方なかった。

今思えば何故笑って話す事が出来なかったのか。そんな感傷的な気分になる事自体、今の俺は酷く不安だ。それでも幼かった頃の親父と一緒に遊んだ記憶を辿ると、自然に笑ってる俺がいる。

「あの頃は親父が大好きだったんだよね……」

父は月に一度の安いサラリーを手にする為に夜遅くまで働いていた。不器用な父だという事に気づき始めたのは中学に入った頃だった。この頃から家族の歯車が狂いだした。

妹は俺と6つも年が離れている。俺も不安を抱えたが、妹はもっと不安だったのかも知れない。確かこの頃妹はまだ幼稚園に通っていたように思う。友達的环境と自分の環境の違いに得体の知れない困惑もあったようだ。

去年の墓参りの時、俺は妹に当時のこと聞いてみたが、あまり覚えてないと言った。ただ、妹にとって親父は「優しいお父さん」だったようだ。

親父に限ったことではないが、崩壊したのはうちだけではなかったようだ。父権の崩壊。近代化の崩壊と共にそういった意識が芽生え始め、この国はダメになってしまった。世の父親がダメ親父のレッテルを貼られるようになったからだ。

親父もまたその「ダメ親父」のレッテルを貼られた一人になってしまっていた。家族からそして社会から。

戦後、日本は「追いつけ追い越せ」の精神で、世界でも胸を張れる国家となった。近代化の成功。それは良いことだけではなかったようだ。いわゆるバブルの崩壊。これが近代化の終着駅となった。頑張って近代化を成し遂げた「おじさんたち」は腑抜けてしま

ったのである。最高を手に入れ、周りが見えなくなっただのかも知れない。

父はまじめだけが取り柄のさえない男だった。母親は何故この男を選んだのだろう。俺には分からなかった。中学に入った以来、ずっとこれが疑問になっている。しかしその疑問について母親に尋ねたことは一度も無い。

自分でも気づかなかったが、「愛」が無くなつてるという現実。それを知るのが怖かったのだ。この年になった今も母親には聞くことはなく、もちろんこの理由は分からない。

いかにまじめであれ死の使いは平等にやってくる。それが人より早かった。いや、早すぎたというべきか。

胃癌だった。発見が遅れた為、各臓器に転移しもはや手の付けられない状態であった。直接の死因は肺癌によって出来た血の気泡のせいだった。

社内の健康診断で引っかかり、病院へ行つたその日、親父は死の宣告を受けたのだった。余命二ヶ月。それはあまりにも残り短い余生だった。

すでにこの頃父の様態は良くなかった。今思い返せば顔色が悪く、咳き込んでいたように思う。心配した母親はいつも「大丈夫？」と聞いていた。決まって親父は「大丈夫だ。ちよつと疲れが溜まつてただけだよ」と笑っていた気がする。

その笑顔が痛かった。親父が嫌いな俺にとって、その笑顔は強烈に俺を刺激した。心底憎めなかったのは親父の周りに心配かけさすまいとするその心だったのかも知れない。

数週間前から家で時折見る父の姿は半病人に近いものがあつた。本当は心配だった。しかし嫌悪していた俺には出来ない事だった。

親父の死はあつけなかった。

その日学校から帰ると台所のテーブルに母親からの置き手紙が置いてあつた。

『お父さんが緊急入院。冬哉も帰ったらすぐにきて』

一緒に病院の連絡先が書いてあった。一瞬ためらった。行くべきかどうか。俺にその資格があるのかどうか。そして俺は悩んだ末、行くことにした。

急いで病院に行ったが、時すでに遅かった。俺は親の死に立ち会えなかったのだ……。

悲しかった。親の死がこんなにも辛いものだったとは。悔い。

何故俺は親父を認めることが出来なかったのだろうか。何故憎む必要があったのだろうか。

何故俺は向き合えなかったのだろうか。親父に。そして自分自身に。

中学の頃、親父と激しく口論になったことがあった。些細なことから衝突だ。どこ家庭でもよくあることなんだとは思う。

親父を罵倒した。親父を否定した。しかし親父はそのことには何も触れなかった。それは親父自身がよく分かっていたことだったのだろう。今にして思う。あの時親父が俺に言ったこと。

ただ時々思う。あの時、病室に入ってもうすでに死んでいた親父を見たとき、「本当に悲しかったのか？」と。病室に入ったとき母親と妹が泣いていた。俺は「つられて泣いた」のではないのかと。今となってはもう分からない。だが、今は違う。

後悔の念はいつも取り返しのつかない自体になってから訪れる。

「なあ、母さん。俺さ、親父に謝りたかったよ」

せめて母親に本当のことを言っておくべきだと俺はその時思った。

「その気持ちさえあれば、お父さんはきっと幸せよ。ううん。冬哉と弥生子が今こうしてお墓の前にいる。そのことが何より、お父さんへの贈り物よ。後悔しちゃ駄目」

多くのミンミンゼミが鳴く中、ひぐらしの鳴き声も聞こえる。彼らの鳴き声が鎮魂歌のように。俺の心に突き刺さる。

た。

俺は親父の分まで生きなくてはならない。なぜかそう熱く思え

「始5」  
第五話：文弥1

気づけばもう夏は終わりを告げ、秋が訪れていた。

日の差す時間は日増しに短くなってきてはいるが、残暑とまではいかないうちにしても連日まだまだ暑い。

たはのうぢみや

竹内文弥ことフミヤは目覚まし時計をAM:8:00にセットしていた。目覚ましが鳴ると一瞬びくんとして起きたが、あまりの不快さに目覚ましを投げ飛ばした。

そのまま「うるせえ」と再度夢の中に入っていこうとするが、足下に投げ飛ばした目覚ましは再度鳴る。

[illegible]

二日酔いで気分が悪い。

四畳半しかないその部屋は足の踏み場も無いほどに散らかって  
いた。まるでゴミの中でフミヤは寝ているかのようだ。

「屋根があるだけで路地裏のホームレスと何の代わりも無いんじゃないのか？」

と以前高校の頃からの腐れ縁で未だに交流のあるユースケに言われたことがあった。

だいたい医者の子で金持ちのオマエに、んなこと言われたかねーよ。と思うが、確かにそうかも知れない。

俺だつて好きでこんなところで寝てる訳じゃないんだ。もっと広い部屋、そうだなヒルズくらいの部屋だつたら俺だつて綺麗にするさ。金さえあればこんなところからおさらばだ。別にここが好きって訳じゃない。貧乏が悪いんだ。

会社をやめてそろそろ半年が経つ。退職金が出るほど働いちゃいなかった。上司の理不尽な要求にキレてやめてやった。

いつか殺してやる。そう思っていたが、流石に自分が犯罪者になるのはごめんだ。あんなヤツを殺して自分を人生を棒に振るのは

馬鹿らしい。人を殺しても捕まらない世の中だったらいいのにな。

いつも昼過ぎからでないと起きないのに、何故目覚ましをそんな時間に設定したのか思い出すのに少し時間がかかった。

今日は朝からパチンコに行く。フミヤは大学に入った頃からパチンコにハマっていた。留年したのもこれが原因と言っても過言ではない。周りがスロットにハマる中フミヤはずっとパチンコ一筋だ。気づけば依存症。毎日でも打たないと何故か落ち着かない。しかしここしばらくの間は金が底をついたので行けていなかった。行かなければ行かないでなんとかなるのだが、一度パチンコのことを思い出すと居ても立ってもいらなくなる。

フミヤはなかなか起きられずにいた。夢と現実の狭間にいるような感覚。

寝返りを打ったとき、頭に違和感を感じた。どうやら頭の下に携帯があるようだ。寝惚け眼のまま携帯を見ると一件のメールの通知がある。

『9/17(水) 7:27:今日ちよつと会いたいんだけど』

誰かと思えば、ナナからのメールだ。

あの性欲の塊のような女。アイツは俺を道具としてしか思っていない。しかもこんな朝早くから何を言っただやがる。バカじゃねーの？ 朝っぱらからやめてくれ。時間的に出勤前に打ったようだが、やっぱアイツは俺のことなんて何も分かつちやいない。

アイツと会うのはもはや「義務」以外なんでもない。こうしてメールのやりとりをすることすら面倒で仕方が無い。何にしても俺はまだ「寝てる」ことになってる。返信は今じゃなくてもいいだろう。

とにかく体を起こすかと、ようやく重い体を起こし服を着替える。カーゴ系のパンツにXXLの極彩色のロングTシャツを着ると、部屋のオマケに付けたようなあまりにも貧しい洗面台の前に立ち鏡

を見る。

不精髭を剃るか剃るまいか考えるが、このまま伸ばそうかと思うと、やめるところにした。ワックスを少し長めの金髪に擦り込み整える。シルバーのメッシュの見え方がイマイチ決まらない。仕方ないのでキャップを手に取り、少し深めにかぶる。

メールの返信は昼過ぎ頃にも一応しておくか。しなきゃしないで後々面倒だ。

俺の住む四畳半しか無い汚いアパートから数分離れた場所に、異様なまでに派手な電飾で飾られた店はある。俺の行きつけの店だ。店に着くとすでにかなりの人数が並んでいた。俺は新台狙いでわざわざ朝から並びにきた。並んでる連中が新台狙いなのかまでは分からないが、ギリギリなんとかうまく座れそうな気がした。

しかし上着を持ってくればよかったと少し後悔した。いくらまだ暑いとはいえ、もう九月の中旬。朝は意外と冷える。ロンTだけでは少し辛いかも知れない。

煙草に火を付けようとした時、誰かが俺に声をかけてきた。

「よっ、おはようさん」

誰だ、と思ったら昨日一緒に飲んだ常連のヤツだ。たまたま誘われて一緒に飲んだが、まだ互いに名前を知らない。

所詮はパチンコ屋で出会った仲。飲みながら話した内容にしてもパチンコの話や店の話ばかりだ。何を話してたかなんて覚えて無いし興味もない。

年は恐らく俺とあまり変わらないだろう。俺が今23だから、コイツもそんなくらいか。背格好も俺と対して変わらない。170センチ前後くらいといったところか。不本意だが恐らく他人から見れば「連れ同士」にしか見えないかも知れない。

「ああ。おはよう。昨日は流石に飲み過ぎた。あつたまイエよ」俺はわざと辛そうに言ってみた。特に深い意味は無い。あくまでもなんとなく。



笑いながら男は「確かにアンタ飲み過ぎだよ」と言った。

一瞬頭にくる。笑いながら「アンタ」ってどういうことだ？

俺を誰だと思つてやがる。ま、こんなところでもめたつて何の特に  
もなりやしない。パチ屋から出入り禁止をくらうだけだろう。俺は  
無駄なことはしない主義だ。パチンコが無駄だと言つてしまえばそ  
れまでだがな。

結局開店を待つまでの間、そいつとどうでもいいようなパチン  
コの話で盛り上がる。あの「予告」は熱いだのアレが外れたら不調  
台になるだの、あの演出の時は連打した方がいいとか、いわゆるパ  
チンコ用語の「オカルト」話ばかりだ。

コイツ、ホントにバカだな。パチンコを全く分かっていない。  
そもそもコイツはパチンコの仕組みが分かってないようだ。パチン  
コの「予告」に意味などない。玉が真ん中のスタートに入った瞬間  
に「当たり」か「外れ」かが決まる。それから内部で演出が決定す  
る。どんな予告が来ようがすでにその時に当たり外れは決まってい  
る。

しかしこういうヤツが逆に「積む」からおかしな話だ。

「そう言えば最近この店の社員が死んだらしいな」

突然男の言い出したことに俺は驚いた。しかし俺は「へえ」と  
あまり興味を示さないような態度をとってみる。しかし続けて男は  
言う。

「最近見ないなと思つてたんだが、もう１ヶ月ほど前のことら  
しいぞ」

確かに家からは近所だが、この店に通うようになってからまだ  
１ヶ月しか経ってない。当然それ以前のことを俺が知る訳もない。  
そもそも店員が辞めようが死のうが俺には全く関係ないことだ。

恐らく昨日の酒のせいだろうが、不意に目眩がした。しかしそ  
れは一瞬だけのことだったので特に気にするようなことではなかつ

た。

「1ヶ月ほど前？ その頃はまだこの店に俺は来てない」

俺はそう答えたが、その男は何故かニヤニヤと不気味な笑いを浮かべていた。

「誘1」 第巻話：冬哉2

都心から少し離れた隣県に近い山と言っても差し支えのないところ。そこにある寺に親父の墓はある。例年通り俺たちは墓参りに来ていた。

「ねー、アニキ。これってなんなの？」

不意に弥生子は墓を磨く手を止め、指さしながら聞いてきた。  
「これ何って、オマエ……。うちの家紋だよ。知らないのか？」

弥生子の指の先には墓に刻まれた我が家の家紋があった。

これは確か「矢」をモチーフにした紋だ。かなり以前、親戚の誰かに聞いたことがあったが正確な名前は思い出せない。確かアレは親父の葬儀の時だった気がする。つとなると10年も前か。普段から家紋に馴染みなんてないし、忘れていても不思議じゃない。まあ、弥生子が知らないのも無理ないか。

弥生子は座り込み、「へー。これが家紋なんだあ」とまじまじと家紋を見始めた。

「で、この家紋はなんていうの？」

太陽の光を眩しそうにこちらを見上げながら聞いてくる。

「なんて言ったっけなあ……。『なんとか矢』だっけか？」

全く思い出せない俺を軽蔑するかのような目で弥生子が見る。  
「使えない兄貴」そんな風に言われてるように思え、いい気がしない。

しかし兄貴ぶって言ったことを少し後悔した。「どうやら墓の手入れは終わったようね」と言いながら、墓に供える花と線香を取りに行っていた母さんが戻ってきた。俺は助け船を出して貰おうとしたが一瞬遅かった。

「っんだよー。アニキだって知らないんじゃない。ねえ、母さん、これなんつーの？」

俺に目を合わせることなく、母さんの方へ顔を向けた。一瞬軽く睨まれた気がする。

線香に火を付け、花の傷んだ葉を丁寧に取り除いている母さんは「しょうがないわね」と言わんばかりに答えた。

「あなたたちが知らないのも無理ないわね。最近の若い人は家紋を知らないもの。目にする機会が減ってるし」

誰かが参ってくれたのか、親父の墓に花が供えられている。しかしすでに酷く枯れていた。この猛暑のため、すぐに花が枯れるのは仕方がないことだが、実際どれくらいで枯れてしまうのか迄は全く分からない。ゆえにこの花がいつ供えられたものなのかまでは分からない。そんなことより”誰かが花を添えてくれている”ということになんとか少し嬉しくなった。

その花に「どなたか知りませんか」と母さんが一礼し、取り除くと、さつきからしきりに手入れをしていた花を供え、墓に合掌した。

少しの間を置き、再び母さんは口を開いた。

「ま、私の世代でも意外と家紋を知らないものよ。なんていうか日本の文化である家紋もいつの間にか忘れられてるような気がするわね」

少し微笑み、「ほら、ちゃんと拝みなさい」と俺たちに数珠を渡した。

「俺は自分の持つてるからいいよ。それにさつきも拝んだぜ？」

自分が数珠を持つようになったのは社会人になってからだ。高校卒業と共にたまたま知り合いのコネで就職できた会社はいわゆる広告会社だった。就職早々に上司が亡くなった。その時急に必要になったので購入したものだ。

母さんが「口答えしないの」と言わんばかりの表情でこつちを見たので俺は慌てて拝むことにした。弥生子も母さんから自分の数珠を受け取ると軽く拝んだ。

「この紋の名前は『丸に違い矢』<sup>まるのちがいはや</sup>っていうの。特別変わった紋じゃ

ないらしいよ。むしろよくある家紋らしいわ。ほら、あそこのお墓にもあるでしょ？」

母さんは三つほど離れた先にある墓に顔を向けて言った。確かに同じ紋のようだ。他の墓をよくよく見てみると、いくつかその『丸に違い矢』を見つけることが出来た。

「ふーん。珍しいって訳でもないんだね……なんかつまらないな」  
弥生子は感心しつつも不満そうに呟く。確かにその気持ちも分からなくない気がする。

「そんなこと言うもんじゃないわよ。確かによくある家紋だし、謂われもよく分からないけど。死んだ父さんなら何か知ってたかもね。」

前に父さんから聞いたことあるんだけど、『黒沢』は元々『平家』の出らしいんだけど、その家紋は『馬』をモチーフにしたものだったって言うてた。

でも、本家から分家へ移っていくうちに、いつの間にか我が家では『矢』をモチーフの家紋になっていったらしいのよね。

あんた達のおじいちゃんが若い頃は『丸に違い矢』じゃなくて、単なる『違い矢』だったらしいのよ。なんで『丸』がついたのかはよく分からないけどね」

母さんは「暑いわね」と日傘を取り出した。母さんは何かする度に何か言う。これは完全にクセだ。いちいち反応していたらキリがないことくらい俺も弥生子も承知だ。

弥生子は「『平家』とかすごーい！」とはしゃいだが、すぐにそれを母さんが制した。

「別に直径の家柄でもないし、今の私たちの生活に何の関係もないでしょ？ 今は今。昔は昔よ」

俺は黙って聞いていた。少しでも自分のルーツが知れた気がして、なんだか嬉しい気分になったような。いずれ俺も自分の子供にうちの家紋『丸に違い矢』を継承させるのか、と思うと少し幸せな気持ちになれた。なんでなのかは分からない。

「ま、母さんも聞いたただけの話で家紋のことなんて全然分らないけどね」

母さんは少し笑いながら言ったが、墓を見つめるその目に表情は無かった。

「あ、そうそう。アニキ、ちと聞きたいんだけどさ、『オトノナイセカイ』の噂聞いたことある？ アタシのダチのアヤ知ってるでしょ？ あの子がその噂にハマってるみたいなんだよね。アタシもまだ詳しいこと聞いてないから良く分かんないんだけど」

墓参りを済ませ、そろそろ帰ろうとしたとき、弥生子は突拍子もないことを聞いてきた。

当然俺はそんなことを知る訳もなく、「知らん」と一言返事した。「んじやいいや」と弥生子は言った。一瞬、寒気にも似た違和感を感じた気がしたが気のせいだろう。

「ちよつと俺先に帰るわ」

俺は母さんにそう告げた。

「分かった。来年は良い報告を父さんにすることが出来ると良いわね。それが父さん出来る唯一のことよ」

分かってるよと、俺は母さんに言い、二人とは別に一人で来ていた俺は先に帰ることにした。

アニキ！ と帰ろうとする俺に「レイさんによろしくw」と弥生子が笑いながら言った。

俺は原付、母さんと弥生子は車で来ていた。流石にここまで原付で来るのは骨が折れた。帰りもあの長い道を原付で帰るのかと思うと少し憂鬱だ。

今日は墓参りの為に上司に無理を言つて有給を取らせて貰った。墓参りはほぼ午前中で終わるため、昼から会わないかとレイを誘ったのだ。今日の墓参りも一緒に行くかと誘ったが、「来年は一緒に行きたいね」と断ってきた。それは来年二人が入籍することを

示す現れでもあることは俺にもよく分かっていた。

レイは大学へ講義に行くと言っていたが、午前中で終わるので、昼から落ち合おうと約束していた。たまには映画でも行くか？ と誘ったが、買いたいものがあるのと、言われた。

寺のお粗末な駐車場に駐めていた原付に跨った時、ふいに携帯が鳴った。それはレイからの電話だった。

「トウヤごめん。今日無理になったよ」

## 「誘2」 第三話：弥生子2

アヤからのメールは実に不可解なものであった。

『オトノナイセカイのウワサ知ってる？』

見た瞬間から、いや正確にはもう少し前からだが、あまりいい感じがしない。

そもそも私は噂話が好きじゃない。噂話のほとんどは本当にただのウワサだし、信憑性のある話自体存在しないに等しい。

なんでアヤは「ウワサ」が好きなんだろう？ いつも思う。アヤだけじゃない。自分の周りの連中だって「ウワサ」が好きなヤツが多い。なんで何の信憑性も無い話題で盛り上げられるのだろうか。アタシには理解出来ない。

ふと時間を確認すると十二時を回って日付が変わっていた。

とりあえずアタシはアヤに返信することにした。なんて返信しようか散々悩んだあげく、普通に返すことが一番いいと思った。

『知らないヨ？ それがどったの？』

しかしそれからアヤからの返信は無かった。

かれこれ1時頃まで待ったが流石にこっちも眠くなったので寝ることにした。どっちにしても明日も補習だ。アヤも来るだろうしこっちから聞かなくても「ウワサ好き」のアヤのことだから聞かなくとも言ってくるだろう。

急激な眠気がアタシを襲う。気づけばアタシは深い眠りに落ちていた。

不思議な夢を見た気がする。そこがどこなのか全く分からない。

『オトノナイセカイに関わっては……駄目……』

誰かが言った気がする。

『オ……トノナ……イセ……カ……イに……ふれる……た……めに



……は……」

違う誰かが言う。

『モウマニアワナイ……』

得体の知れない何かを感じた。女性と思われる影を見たような気がした。

八月七日。夏期補習最終日。

この日、アヤは来なかった。メールしても電話しても出なかった。

補習が終わった昼下がり。帰り道にアヤの家に寄ってみたが人の気配は無かった。もちろん誰も出ない。

流石に心配だ。何かあったのだろうか。ムカツクけどやっぱアヤはトモダチなんだ。なんだかんだ言ってもいつも一緒にいるのはアヤだった。つまらない話が多いとも思っているだけで、アタシはひよっとしたら自分から他人を遠ざけているのかも知れない。

なんでもないことなのかも知れない。アタシはメールに、ケータイだけに依存してる訳じゃないんだ。人に依存しているのかも知れない。寂しいのは嫌だ……。

結局、夜になっても連絡がつかなかった。

ブーブーブーブーブー……。

日付が変わった深夜、突然携帯が鳴った。「アヤであって欲しい」と気づけばアタシは祈っていた。恐る恐る携帯を開く。ホッと胸をなで下ろす。安堵感で少し気が抜けた。それはアヤからのメールだった。アタシは急いで内容を見ることにした。

『いっめ~~~~ん！ 昨日は寝ちゃったっw あはは m（）。・。・（m』

呆れた。なんてこった。アタシは心配はなんだったのか。この

女はふざけているのか？

『ちよつと！ 補習にも来なかったし、帰りには家まで行ったんだよ！？』

流石にむかついたがアタシは返信した。すぐに返信が届く。

『絵文字も顔文字もないとか、怖いって。ごめんって言ってるんじゃない？（´、\*）』

この態度にはかなりムカつく。心配してマジで損した。こんなヤツがトモダチとかあり得ない。少しでも「トモダチ」だと思った自分が愚かに思え、縁を切ってもいい気がした。

『心配して損したよ』

それだけ返信するとベッドに潜り込んだ。

ブーブーブーブーブー……。

携帯が鳴っている。しかしアタシは無視することにした。あーうるさいうるさい！ 携帯の電源を切り、ベッドの上に寝転がった。そして気づけばアタシは眠ってしまっていた。

八月八日。

今日はアタシが小さい頃に死んじゃったお父さんの命日だ。お母さんとアニキと三人で例年通り墓参りへ朝から行って夕方には帰ってきた。

アニキは彼女のレイさんと会うと言ってた。母さんは買い物に出かけた。アタシは独りぼっち……。しかし家に戻るとそこにはレイさんと出かけてるはずのアニキが家にいた。

「あれ？ レイさんは？」

「ああ、なんか急用が出来たみたいで結局会ってないんだ。だから今まで暇つぶしにテレビ見てたよ」

リビングのソファで寛ぎながらテレビを見るアニキは気まずそうに笑った。

アタシは「そっか。残念だったねw」と少しアニキを茶化して

自分の部屋に戻った。

部屋に入って思い出した。携帯を持って行くのを忘れていた。いわゆるアタシみたいなイマドキの女子高生が携帯を持って行くのを忘れてるとか、かなりどうかしてる。

そして携帯の電源を切っていたのを思い出し、電源を急いで入れた。

電源が入り、携帯の画面に「welcome」の文字が表示される。そして「着信拒否が設定されています」と出る。ワン切り業者やウザイ男の電話番号を何件分か登録しているためだ。

待受画面になると、ユカともう一人仲の良いトモダチの三人と一緒に撮った写メが写る。アヤの顔を見るとむかついてくる。もう待受も別のものに変えようと思った。

すると「受信中」の文字が画面に出た。その数は「12件」。嫌な予感がした。見てみるともちろんそれはアヤからの大量のメール。

その数は本当に気持ちが悪いくらいに多い。すぐに削除しようとしたが、念のために中を古い順から見っていくことにした。

「きもっ……」

思わず口に出してしまふ。

『8/7(木) 23:35:ちょっとゴメンって！ 返信してよ！』

『8/7(木) 23:42:冗談だよねえ？ ヤエちゃん。怒らな

いだよ？ (っ・・)』

『8/7(木) 23:56:マジで怒らせちゃったのかな……』

『8/7(木) 23:59:ごめん 冗談抜きで本当にごめん』

『8/8(金) 00:07:起きたらすでに昼でえ 諦めてさらに寝ちゃったの そしたら親と一緒に外出しようっていうから 出ちゃったの』

『8/8(金) 00:15:ケータイの充電忘れてて……』

『8/8(金)00:20:こんな時にこんなこと言うのは… 間違ってると思うけど… 言わせて』

『8/8(金)00:22:昨日言ったことなんだけどのウワサのこと』

『8/8(金)00:25:ウワサって言ってもまだほとんどの人が知らないと思う』

『8/8(金)00:30:意いフェ音ふい f え m おい r h n f a m れい l j g れお j … m l g k …』

『8/8(金)00:38:じょ p つ え j e を @ p、ヤエし t かい ひおえ r o j、頼れお j p 6 j を、ああ』

『8/8(金)00:50:k ご s ふ え p l h f r g k @ i げ l @ p l k @ p r g s p k @ a g けお k b げお p j つ つ g e l r j ほ r j h m : i r q i t 4 9 4 o h k t r k @ 助けて』

脳裏にフラッシュバックする。夢の中で見た「オトノナイセカイ」。

### 「誘3」 第参話：畏怖嫌厭（いふけんえん）

レイとの約束が無くなった冬哉は結局家に帰り、暇を持て余すこととなった。

一人で買い物や映画を見ることも考えたが、テンションが少々下がったため、一人での行動はやめることにした。

無駄な時間だとは思いつつも、帰宅した冬哉は一階のリビングのテレビを付けた。せっかくの有給が水の泡だなと思いながらもつまらない番組を見る。

しばらくすると弥生子が帰ってきた。母さんは買い物に出かけたそうだ。

あまりにも退屈さに急激な眠気が襲ってくる。思わずウトウトしたその時のことだった。

「いやあああああああ！」

二階の弥生子の部屋から叫び声が聞こえた。あまりにも突然の出来事に一瞬訳が分からず戸惑ったが、一気に眠気は飛び、冬哉は足早に弥生子の部屋に向かった。

そこには危険が潜んでいるかも知れない、不審者が侵入しているかも知れない。そんな可能性のことを考える必要はなかった。「妹に何かあった」それだけで冬哉の体は自然に動く。

幸いドアに鍵はかかっていないようだ。

危険な雰囲気はしない。軽くノックをするが返事はない。さきほどの叫び声以来何も音がしない。静寂に包まれている。その静寂が一瞬嫌な想像をしてしまう。想像より行動だ、と自分に言い聞かす。

「すまん。勝手に入るぞ」

ドアに手をかけ、断りの一言と共に、冬哉は弥生子の部屋のドアを勢いよく開けた。

するとそこにはベッドの上で頭を抱え、涙を流し、顔が引きつった表情を浮かべる弥生子の姿があった。突発的なパニックのようにも見える。幸い不審者の姿もなく、部屋が荒らされた様子もない。「弥生子……。大丈夫か？ 分かるか？ 俺が分かるか？」

酷く怯えてるようだ。冬哉は出来るだけ警戒されないよう注意しながら優しく声をかけた。弥生子は小刻みに震え泣いている。目の焦点は合っていない。

気づけば何かぶつぶつと呟いているが、何を言っているか聞き取りづらい。

「オトノナイセカイ…… オトノナイセカイ…… オトノナイセカイ……」

何を言っているのか聞き取れたとき、冬哉は悪寒を感じた。

弥生子は何かに取り憑かれてしまったのだろうか。しかしそのような雰囲気ではない。精神的に混乱してるようにみえた。

冬哉は弥生子を包み込むように抱きしめ落ち着かせようと試みた。それは凄く長い時間のように思えた。

数分後、なんとか弥生子は落ち着きを取り戻したようだ。

「どうした？ 何があった？」

弥生子はそれでもまだ酷く怯えてるようだった。

冬哉は出来るだけ柔らかな口調で聞いてみたが、なかなか最初の一口が出ないようだ。少し待ったところで弥生子は口を開いた。

「ヤバイよ…… アタシ、オトノナイセカイに引き寄せられてる……みたい……」

弥生子が言っている意味がよく分からなかった。

冬哉は首をかしげる。それに気づいた弥生子は落ち着きを取り戻し始めたのかゆつくりと話し始めた。

「今日、墓参りの時、アニキに聞いたでしょ？ ウワサのこと」「やはりそれか。」「オトノナイセカイ」やはりこれが関わっている。

とにかくここは黙って聞くことに専念するべきだ、と冬哉は考えるが、嫌な予感や不安な感覚が襲ってくる。何か危険な気がする。本能がそう訴えてくるような感覚。何故かその場から逃げ出したくなかった。

なるほど……弥生子が怯える理由は”これ”か……。しかし聞かねばならない。

「アタシにも『ウワサ』がなんなのか分かんない……。でもアヤが巻き込まれてる。アタシに助けを求めてる……」

弥生子の目から涙がこぼれる。どういうことだ？　しかし話が見えてこない。

「これ、見て。アヤからのメール……」

涙を拭いながら弥生子は自分の携帯を開け、冬哉に見せた。携帯を受け取った冬哉は順番にメールを見た。

なんだ？　この異常なメールは。気持ちが悪い。吐き気が襲うようなその内容。生理的に何か嫌な感覚が冬哉を襲う。これは一体。

「文字化けしてるな……。こんなこと言うのはおかしいかも知れんが……オカルト的というか、ホラー的というか……何か霊的なものを感じるのは気のせいか？」

冬哉は口に出すまいとしたが、ここはあえて言うべきだと考えた。こんなメール普通ならあり得ない。「そうかも知れない……」弥生子は呟くように言った。

親父はどうだったか知らないが、俺たち家族にはいわゆる「靈感」のようなものがある。言葉では説明のしようが無いが、それはあくまで微弱なもので感覚的なものだ。「そこに何かがいると感じることがある」という程度の力。

靈感の強い者に言わせてみれば、「普通の人より少しだけ敏感」という程度で、むしろ霊に取り憑かれやすい体質（？）らしい。その体質のせいだからかまでは分からないが、何か「霊的」な違和感を感じる。どうやら弥生子もそれを感じ取っているようだ。

「アニキ……ヤバイよ……さっきとんでもない『力』みたいなのを感じた……これは絶対に『ウワサ』が絡んでるとしか思えないよ……。もうアヤは駄目かも知れない……」

確かに今までに感じたことの無い大きな何かを感じた。弥生子は喪失感や絶望に囚われそうになっている。

俺たちのような微弱な力でも感じるという最早「知りもしないウワサ」から逃れられない、そんな気がした。

数分、いや数十分の時間が流れたのかも知れない。冬哉は考えた末、一つの答えを出した。

「ユースケに会ってくる。アイツなら何か分かるかも知れない」

冬哉は友人であるユースケの存在を思い出していた。彼ならひよっとしたら何か知っているかも知れない。いや、何か解決策を見いだしてくれるかも知れない。

「え？ ユースケさんて、あの医大生の？」

少しずつ落ち着きを取り戻し始めた弥生子はきょとした顔付きで不思議そうに言う。

「そうだ。アイツはオカルトとかホラーの話が好きでな。その手の話には詳しいんだ」

池永裕介。コイツとは高校以来の友人だ。

医者の子で本人も医者を目指し今は医学生をやっている。靈感は特にないが、オカルトやホラーが大好きでその趣味のほとんどがその手のものだ。また博識でなんでも知っている。俺の良き親友であり、知恵袋でもある。

万が一の可能性だが、ひよっとしたらその「ウワサ」についても何か知っているかも知れない。淡い期待には変わりないが、他に誰も頼る相手がいないだけにユースケの存在は非常に助かる。

冬哉は携帯でユースケに連絡を取った。

話の内容は話さなかったが、幸いユースケは暇を持て余していたらしく、「急用」であることを伝えるとすぐに会えることになっ



た。そして双方の距離から近いファミレスで会うことに決め、すぐにお互い家を出ることに決まった。

「私も行く」

弥生子の申し出を断る理由はなかった。俺が伝えるより、当事者の弥生子もいた方がいい。と冬哉は判断した。

「分かった。今すぐ出るから用意しろ」

どうやら母の明美は車を使わずに買い物に出かけたようだ。冬哉は車に乗り込みエンジンをかける。弥生子は助手席に座るが何も話さない。不安で仕方がないのだ。

結局二人はファミレスに着くまで一言も言葉を交わさないままだった。

## 「誘4」 第四話：メール

すでに日は暮れ、時計の針は七時を示していた。

ファミレスに入ると、まだ来てないのかと冬哉は周囲を見渡すが、ユースケの姿が見えない。

店員に人数を聞かれる。煙草を吸うかと聞かれたので「吸う」と答える。すると「奥の空いてる席へどうぞ」と言われその席に向かう。入り口からでは敷居で見えなかったが、一番奥にある窓際の席に携帯電話をいじっているユースケの姿を見つけることができた。店員に断り、冬哉と弥生子はユースケの元へ向かった。

ユースケもこちらの姿を確認すると「よう」と手を挙げた。相変わらず背が高い。百八十センチの長身。冬哉と比べるとかなり差がある。立ち話をするとう首が疲れるくらいだ。

「急にすまん」

ユースケと向かい合わせになる形で冬哉と弥生子は座った。

「ああ、気にするな。こっちは『狩り』してただけだしな」

と笑いながら携帯を閉じユースケは言う。

「狩り」とは今流行っている携帯型ゲーム機のソフトのことだ。いわゆるモンスターを狩るだけのゲームだが、そのゲームの奥深さと多人数で大型のモンスターを狩るというゲーム性が受けて凄く売れている。冬哉も時々一緒にやるがユースケほどハマっちゃいない。すでにユースケは注文を済ませていた。とはいえドリンクバーのコーヒーだけのようだ。冬哉と弥生子もそれに倣う訳ではないが同じくドリンクバーを頼み、冬哉はコーヒー、弥生子は紅茶を入れた。

「また『狩り』やってたのかよって、相変わらず好きだな」

冬哉は少し呆れ気味で言った。

「まーな。それで急用ってのはどうしたんだよ？ ヤエちゃんもいるし電話の雰囲気からただ事じゃない気がしたんだが？ あ、ヤ

「エちゃんこんちわっ」

ユースケは普段はおちゃらけた感じの人柄だ。口数も多く割と八方美人なタイプである。しかし今は冬哉と弥生子の様子が「いつもと違う」ことを感じ取っていた。

「お久しぶりです」

弥生子の覇気の無い返事にユースケの表情が曇る。

これはただ事ではない。そう思ったのであろうか、ユースケは真剣な顔つきで二人の様子を観察した。少しの沈黙が場を包み込むが、それを苦にするほどのことでは無いとユースケはその場を見守っていた。そして冬哉が口を開き、ことの成り行きを話した。

「なるほどな。悪いけどヤエちゃん。そのメール見せてもらえるかな？」

弥生子は「あ、はい」と素直にアヤのメールを開き、ユースケに渡した。

ユースケが信用できることを弥生子も知っている。ましてや今の状況ではユースケしか頼りに出来る者がいないのだ。携帯を見せることに躊躇する必要なんてどこにもない。

真剣な顔つきでユースケはメールを確認している。しかし意外と早く全てを見終わると、安堵の表情を浮かべた。むしろ少し笑みをこぼすかのようでもあった。その表情に冬哉は呆氣にとられそうになり、一言文句を言おうとしたが、

「ヤエちゃん、安心して良いよ。少なくともアヤちゃんは大丈夫だ。無事だよ」

と、ユースケは意外なことを言った。その答えに二人はもちろん驚きを隠せなかった。

「え？ ホントに？ っていうかなんで？ なんで大丈夫って分るんですか？」

もちろんそのことに一番驚いたのは弥生子だった。

冬哉にしてもユースケの言うことの意味が全く分からず困惑す

る。それは自分がそのメールを見たときとあまりにもギャップがあったからだ。その雰囲気からやはり「霊的」なものは感じていないようだ。それもあってのことなのであろう。

そしてユースケは語り始めた。

「まず文字化けの部分だけど……。文字化けなんかじゃないよ。これは単なるランダムな文字列だ」

「どういうことだ？」

冬哉は煙草を取り出し、火を付けながら聞いた。弥生子は訳が分からないという顔で啞然としている。

「文字化けにはある種の法則みたいなのがあるんだが……。これはその文字化け特有のものじゃない。完全にランダムだ。恐らく日本語入力の状態でキーボードを適当に叩いたような感じだな。うん、間違いない。つまりだ、いいか？」

なるほど、そう言われてみれば確かにそうかも知れない。

冬哉も文字化けの経験は何度もあるが、確かにあの文字化けは何か不自然さがあった。あのメールを見たときは冬哉自身も混乱していた。その不自然さに気が回らなくても当然と言えるのかも知れない。しかしだからと言ってあの時に感じた「霊的」な違和感に説明がつくはずがない。弥生子も感じた訳だし、あの覚え方は異常と言ってもいいだろう。

そして「ああ、続けてくれ」と冬哉は答える。弥生子も無言でコクリと頷く。

「恐らくだが、これは携帯で打ったものじゃないだろう。パソコンで打ったものを転送してヤエちゃんにメールしたんだろうな。あんな文字化けを自演するには携帯では骨が折れるよ。つまりこれは『故意的』な意志のあるメールということだよ。ヤエちゃんにこんなこと言うのははつきり言って忍びないんだけど、あまりにも作為的で、俺には悪意にも感じられるよ」

弥生子は複雑そうな思いでこれに耐えた。アヤが無事だったことは嬉しい。でも何かそこに「意図」があることが見えたことがシ

ヨックだった。

ユースケが言うには「悪意」を感じるという。弥生子にはそこまでのことは分からないが、これは「裏切り」以上のことに思えてきた。アタシを陥れる何かの「罠」。そう思えてくると弥生子に怒りが込み上げてくる。

しかし弥生子からそれを感じたユースケは再び口を開いた。

「おっと。ヤエちゃん。結論を出すにはまだ早いぜ？　そもそもこれをアヤちゃんが打ったって証拠が何処にある？　ま、そうなるは無事であるという保証が無くなってくるけど……」

重い空気が場を取り巻く。誰も口を開けなかった。結局結論が出ない。沈黙を打ち破ったのは弥生子だった。

「とにかく私は一度アヤと会って話してみるよ……返信もまだしてないし……」

弥生子にとってこれほど辛いことは無いのかも知れない。アヤを信じればいいのかどうかすら分からなくなっていたのである。しかし状況からして危険かどうかまではよく分からないが、確かに会ってみるべきだ。メールや電話だけではその真意は見えないだろう。

「それしかないな……でも弥生子だけで会つのは危険な気もするが大丈夫か？」

冬哉はそれが心配だった。

「会つ」という行為が必要なことは分かる。もしそれが「罠」だったとしたら？　「第三者」の存在があるとするならば？　それに「霊的」な問題もある。これは下手に動かない方が良いのかも知れない。

アヤは無言で首を振った。不安で仕方ない、それは当たり前のことだった。

「しかし……『ウワサ』って何のことだろうな。何にしてもこの『ウワサ』が関わってる気がするよな」

冬哉はしきりに煙草を吸いながら呟く。そして「吸うか？」と

ユースケに勧めるが「やめたいいいよ」と答えた。

そもそも「ウワサ」についての情報が皆無だ。冬哉も弥生子から聞くまではその存在自体もちろん知らなかった。そしてその「ウワサ」自体がなんなのかも分らない状況。

今回のこの一件、本当にその「ウワサ」が関わっているのだろうか。それすら冬哉たちは分からないのだ。

## 「誘5」 第五話：ウワサ

「『オトノナイセカイ』か……」

ユースケが呟いた。

本の一瞬だがその瞬間、何か不気味な違和感がこの場を支配した。それは言葉にならない異様な空気が包み込むかのようだ。しかしそれを感じたのは冬哉と弥生子だけでユースケは何も感じ取れていなかった。

ひよつとすると……と冬哉は考えるが確証を得ないことであつたので、とりあえずこの場ではそのことを考えるのをやめた。

「うん。やっぱりその『ウワサ』が問題だと思う」

弥生子は今感じた違和感には触れずに言った。冬哉もまたそれを汲んで黙って頷く。

ユースケも同調するように頷き、「ちよつと長い話になるけどいいか？」と一言断つてから話を始めた。

「やはりキーワードは『ウワサ』だな。いいか？『FOAF』を知ってるか？」

二人は首を振った。ユースケはコーヒーを一口飲み話を続けた。「『都市伝説』は知ってるよな？」

と、ユースケは二人に聞く。

「『都市伝説』ってアレだろ？『口避け女』とか『人面犬』とか『トイレの花子さん』とかそういうヤツだよな？」

冬哉はもちろん知っているとばかりに答えた。

弥生子は何か別の考えに浸っているようだ。「ウワサ」のことはもちろん気になるが、それ以上にアヤの安否が気になるのであるう。

「ああ、そうだ。簡単に説明させもらうが、『FOAF』ってのは『Friend Of A Friend』の略語のことだ。『友達の友達』という意味で、本来はRDFとかXMLを使って人々に

関する情報、つまりメタデータとその繋がりを公開、共有するための半ば実用的、半ば実験的なプロジェクトなんだ。これを使ってマシンにも扱える自己紹介を記述したり、人や組織、関心領域のネットワーク情報をエージェントに処理させるといった応用が……」

ここまで聞いた冬哉は話を制し言った。

「すまん。何のことだかよく分からん」

「ちよつと話の論点がズレてきたな……こっちこそすまん。早い話がウェブログ、つまりブログみたいなもんだよ」

冬哉も弥生子もそれなら分かると納得した。そしてユースケは話を続けた。

「つまりだな、『FOAF』ってのは、これはさっき言った『都市伝説』の事を差した言葉としても使われんだよね。『友達の友達から聞いた話』これが都市伝説が語られる形の基本パターンなんだ。つまり聞き手が知らない者からの情報で、出元が基本的に確認が来ない。話し手は聞き手に対して話を飛躍をする。話の性質上、少しでも面白くする方が効果的なんだな。真実味と不安とを加えるため、登場人物や地名には話し手や聞き手に取って身近なものが選ばれることが多い。身近な人に起こった真実として語られたり、『新聞に載っていた話』として紹介されたりする。こうして都市伝説は成長していく」

ユースケの話は続く。気づけば弥生子も食い入るように話を聞いていた。冬哉は煙草の本数をどんどん増やす。

「人はなかなか正確に話を伝える事が出来ない。理由はいくつか存在するんだけど、今は関係無いし省くな？ まあ、人は少しでも話を面白くしてしまう傾向にあるんだよ。今のよう情報伝達手段が少ない昔は主に口頭伝達の基本だった訳だよな。でも「話の飛躍」がどうしても絡むから曖昧さが出てくる。民話やお伽噺（おとぎ話）みたいなのはこのFOAFの一つの形である可能性が高い。よくあるパターンの『昔々あるところに……』なんてかなり曖昧だよな？ 民間伝承なんてそんなもんだよ」



そりやそうだと冬哉は苦笑する。弥生子もくすりと笑う。

どうやら弥生子は落ち着きを取り戻してきたようだ。ユースケは話にのってきている。やはりコイツと相談して良かった、と冬哉は思った。

「つまり『曖昧な話』というものは、出所が不明な事が多く、正体を掴みきれないものが多い。話が伝染して行くプロセスで変化を遂げたとか、または始めから『作り話』っていう可能性がある訳だ」

ユースケは一通り話すと再びコーヒーに口をつけた。

「つまり……『オトノナイセカイはアヤの作り話』ってこと!？」

弥生子は居ても立ってもいられず、叫び声にも似た大きな声で言った。

周囲の反応で自分の行動の羞恥に気づくと少し顔を赤らめ、紅茶を一口飲んで落ち着こうとした。

ユースケは「いや、その線はない」ときっぱりと言った。

冬哉も弥生子も話の流れが分からなくなってきた。二人ともユースケの話をもう一度頭の中で整理するが、よけいに頭が混乱してきた。そして「実はな……」とユースケは真剣な眼差しを冬哉に向ける。

「トウヤ……。『ヒサ』を覚えてるか？」

唐突の質問に一瞬冬哉は思い出せなかったが、徐々にその存在を思い出した。

高校の頃の同級生だ。田中久司。そんなによく連んでいた訳では無かったが、同じクラスの中ではよく話していたように記憶がある。ユースケと一緒に三人でよく休み時間に話したもんだ。

「ああ、覚えてるよ。『タナキユー』とか『キユーちゃん』とか言っつてよくからかってたな。ヒサと今でも連絡取ってんのか？ 元気か？」

冬哉は高校の頃に懐古した。気づけばもう五年以上も前のことなんだな。あの頃は早く社会に出たくて仕方が無かったが、今思えばあの頃が一番楽しかった気がする。久々に聞いた同級生の話。そ

れだけで何故か嬉しくなる。

「実は……。そのヒサから『オトノナイセカイ』についての噂で相談を受けてるんだ」

ユースケの発言には驚かされた。まさかすでに関わっていたとは。

オマケにそれがヒサからの相談。しかしこれが噂話、都市伝説の部類である以上、知ってる者がいて当然だ。

すっかりこの三人しか知らないもののような錯覚をしていた。つまり弥生子の想像した「作り話説」の線は消えたということだ。ユースケが否定した理由の謎についてはこれで解けた。

「その内容だが……。ヒサがその噂を聞いたのは会社の同僚だったらしい。ヤツは今パチンコ屋で社員やってるらしいんだが、その同僚も客に聞いたらしいんだ」

「出元は分からないってことか。さっき言った『都市伝説』の典型ということか……」

冬哉は横やりになることを承知で言った。

自分に関わりのある人間が「ウワサ」に関わってきている。ここまで来れば自分も十分に関わっていることは百も承知だ。そしてユースケの反応を待った。弥生子は二人のやりとりと会話を聞くだけしか出来ない状況に少しの安堵感を得ていた。自分は独りじゃない。アニキやユースケさんがいる。アタシも自分なりに頑張らなければ。

「そういうことだな。肝心なその「噂」だが、ヒサがいうにはこんな感じだ」

ユースケはヒサから聞いたという噂を淡々と話し始めた。

夢の中で黒髪の長い女が誘う。

その女に狙われると逃れられない。

女は言う、「あなたの血液型を教えて」と。

そして答えるとその血液型が何であれ、「あなたとは相性が合わない」と言い、「オトノナイセカイ」に連れて行かれる。

「ヒサが言った「噂」。こんな感じだったよ」

ユースケは言った。しかしその表情は不思議だった。

冬哉や弥生子にしてみれば今聞いた話とはんでもない話だ。いわゆる怖い話が苦手な弥生子は恐怖に顔を強張らせている。

冬哉にしても少し寒気を感じるような感覚を持った。しかしユースケはそのような様子もなく、それは「オカルト好き」であるからという理由には見えなかった。

「鎖1」 第巻話：手記1

「鎖1」 手記1

十一月十一日

「一」が四つ並んだその日、彼は亡くなった。

なかむらひるあき  
中村弘昭。二十六歳だった。

彼は何か「噂」の調査をしていたようだ。その彼が亡くなる前日に残した言葉がある。

「僕の推測が当たっているなら、明日、僕は死ぬかも知れない」

何故、彼は死ななければならなかったのか？ 何故、彼は死を予感出来たのか。

その謎は彼の残した手記にあるように思える。

これは生前に彼が調査した手記である。彼のパソコンにその調査報告のテキストが見つかった。原文そのままでご覧頂きたい。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

調査報告1

これは噂に関する調査報告である。  
あくまで分かったことを随時記述していくものである。

## 【噂】

噂とは根本的に出元が分からないことが多いという。

いわゆる「都市伝説」と捉えても差し支えないようである。

都市伝説のその特性は別途資料を用意したのでそちらに目を通して頂きたい。根本的にこの報告書は「噂」の報告であり、都市伝説の特異性を考察するものではない。

都市伝説については下記のURLを参照。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%83%BD%E5%B8%82%E4%BC%9D%E8%AA%AC>

## 【本調査について】

本調査報告の要である「オトノナイセカイ」についての記述をしておきたい。

私はとある人物から依頼することになったが、その依頼とは奇妙なものである。

「噂」の調査をしてもらいたいというものだ。未だかつて噂を調査したことは無い。

まだ多くに広まっていないようではあるが、「オトノナイセカイ」という噂。依頼者によるその噂に関する情報入手の経路については不明である。

何の手がかりも無い状況からの調査であり、それが噂であるため、調査はかなり難航を極めることであろう。

なお、調査内容は噂の詳細を調べるものではなく、噂の正体を調べるものとする。

## 【オトノナイセカイ】

様々な文献（都心伝説、民間伝承など）に目を通したが、それらしきものは見あたらず。もちろん掻い摘んだ調査のため見落としの可能性はある。

「オトノナイセカイ」とは「音の無い世界」であるとは思われるが、その確証は得られない。仮に「音の無い世界」とすれば、そこから想像すると難聴者を指すのではないだろうかと考えるが、「噂」の特性に焦点をあてるとその線はなさそうである。

これは難しく考える必要性は無く、単純に「死」を意味しているものと考えるべきだと思う。

独自の調査（この調査報告については後日記載予定）により、噂を知ることが出来た。その報告は後に記載しておく。

その内容に気になる言葉が含まれている。それはこの調査のキーワードとなるのではないだろうか。

「夢」「黒髪の長い女」「血液型」

少なくともこの3つがキーワードとなるのではないだろうか。

噂の内容はかなり理不尽なものである。「黒髪の女に夢の中で出会うと死ぬ」ということなのであろう。

現在の調査では噂の存在は確認されているが、この噂に関わった者が死亡するという調査結果は無い。もちろん調査を開始して日が浅いため、その点も不明確ではある。

「霊的」なものであるとも言われているようではあるが、非科学的要素が強いため、噂の恐怖を増長させるための尾ひれのようなものであると思われる。

都市伝説の部類であるとするならば、その内容に人物名や土地

名が出てくることが多い。しかしそれも見あたらない。

この噂には都市伝説である特徴が欠落しているように思えて仕方が無い。

「夢」： どのような条件で見えるものであるかは不明である。

「黒髪の長い女」： 髪が長いのか女が長いのか不明である。表現に問題があるのではないだろうか。

「血液型」： これは所謂「血液型占い」と呼ばれるものであろう。科学的根拠の無いものである。

上記の3点を考察すると見えてくることがある。

この噂は釈然としない。言うなれば取って付けたような内容である。創作されたものに違いがないように思われる。

現時点で依頼者に報告するには些か不十分な情報である。情報が少ない今だからこそ出所を特定しやすいことには変わらないであろう。調査は迅速に行う必要性がある。

### 【噂報告】

噂の内容をついに知ることが出来た。それを記載しておく。

『夢の中で黒髪の長い女が誘う。その女に狙われると逃れられない。』

女は言う、「あなたの血液型を教えて」と。そして答えるとその血液型が何であれ、「あなたとは相性が合わない」と言い、「オトノナイセカイ」に連れて行かれる』

作成日：2008/08/09



## 「鎖2」 第三話：信孝2

「オトノナイセカイ」？ なんだそれは。その書き込みの後を追っても特にそれに対するレスもない。完全にスルーされている。

俺もこのままスルーするべきなのだろう。しかし何故か気になる。何度もチェックするがその後「オトノナイセカイ」に関するレスはない。

かといって、自分がレスして聞く訳にもいかない。この場ではそんな空気ではない。ここはあくまでも二ユースに関する話題以外は基本的にスルーだ。

そもそも本当にあの「99」の書き込みの言うように、「宮下事件」と「オトノナイセカイ」に因果関係はあるのだろうか。

いや、問題はそこじゃないのか？ 「オトノナイセカイ」自体の意味が分からない。この掲示板によくいる電波系の書き込み。普通ならそれで終わるはずなのだ。しかし気になって仕方がない。何故俺はこんな書き込みに興味を持っているのだろう。

検索……。やってみるか。

検索サイトで「オトノナイセカイ」で検索してみる。

特に目立ったサイトは見つからない。主に創作系のサイトが目立つ。「詩」や「歌詞」がほとんどだ。いくつかのサイトを試しにクリックして飛んでみたが、やはり「詩」がほとんどで特に気になるような情報は何もない。

いきなり足踏みのようなだ。そもそも便所の落書きと称されるあの掲示板の書き込みを信じた俺がバカだったのだろうか。

不意に目眩がした。まるで何かノイズのような目眩。そういえば随分寝てない気がする。そう考えると体が凄く重くなってきた。今何時だろう。

時計はどこだ？

部屋を見渡すが部屋が暗いので分かりづらい。部屋での明かりがモニターの出す淡い光のみの状況ではちょっと探すのが困難だ。

あの小さな置き時計なんてこの状況で探せる訳がない。だからといって、部屋の照明をつけてまで探す気にもなれない。

携帯にしてもこの散らかった部屋のどこにあるのかすら分からない。携帯を探す行為も置き時計を探す行為と同じく、俺にとつては無駄だ、と思う。

諦めた俺はパソコンのモニターの右端の時計の存在を思い出した。

タスクバーの一番端に時計がある。初期設定のまま。これが一番俺には使いやすいんだ。時間を確認するとすでに朝の11時を示していた。

確か起きたのが昨日の朝5時頃だった気がする。ただ、昼から夕方まで記憶が途切れている。あ、そうか。一時的にでも寝てしまったんだった。テレビも付けっぱなしで、起きたら18時から始まるアニメがやっていたことを思い出した。約17時間か……。もっと……24時間まるまる起きてたような気がしたがそれでもないか。

腹も減った。しかし食欲がある訳でもない。体が重くて食べる気にもなれない。

少し横になりたい。そう思い、ベッドに体を倒した。寝っ転がりパソコンのモニターで少しだけ見える天井をぼんやり眺めてると眠気がやってくる。

「もう少し検索したいんだけどな」

やはり気になる。とはいえ、気力が出てこない。今はこのまま寝てしまいたい……。

ジジジッ

『オトノナイセカイに関わるな』

ノイズと共に何か聞こえた気がしたが、もうすでにどうでもよ

くなっていた。

「冷たい……」

もの凄い量の寝汗での嫌な目覚め。なにやら頭痛もする。若干まだ体も重いが、さつきと比べるとかなりマシなようだ。腹減ったな。

よくよく考えてみれば、丸一日何も食べていない。一階に降りて台所で何か探そうかとも思ったが、お袋がいると面倒くさいことになる。恐らく晩飯も置いてあるだろうが、家のメシを食べる気になれない。

そう言えば、昨日だったか一昨日だったか忘れたがコンビニで買ったパンがあることを思い出した。確かこの辺りに置いていたような気がする。

俺は記憶を辿り自分が置いたであろう場所を探した。もちろん部屋が真っ暗なので手探りで探す。意外とあっさりと見つかった。

カレーパンだ。

俺はそのカレーパンの袋を開け、パソコンチェアに座る。これは俺の拘りのもの。10万以上もする椅子だ。座り心地の良さは格別で、メッシュ素材で背中も蒸れない。

再度、「オトノナイセカイ」について検索を始めようとマウスを握る。

パンを口に入れ、噛んだその瞬間。妙だな。カレーの味がない。オマケになんだかぬるぬるした感覚がある。辛うじて香辛料を感じることが出来る程度だ。

カレーの味ってこんなだったけ？ と思えるような変な感覚。まさか。嫌な予感が頭をよぎる。これは腐っている？

そう思った瞬間吐き気が襲ってきた。カレーパンを握りしめ、口の中にカレーパンを残したまま、大急ぎで部屋を出て一階のトイレへ向かった。

なんとか事なきを得たが、流石に気分が悪くなった。何故か手に握ったままのカレーパンを見るとさらに気分が悪くなる。何故か糸を引いた中身。そしてよく見るとカビらしきものである。最悪だ。腐ってやがる。とことんついてない。

俺はそのまま台所へ向かった。カレーパンを生ゴミ用のゴミ箱に捨てる。食卓テーブルを見ると案の定メシは置いてあった。昨日の晩飯なのか今日の朝飯なのか、それとも昼飯なのか。

もう昼前だから当然のように親父もお袋も仕事に出かけていない。

気分は悪いが腹は減っている。仕方なしに置いてあるメシを食べることにした。

食事を終えた俺は再度「オトノナイセカイ」の検索を再開した。いろいろなパターンを考え、検索してみる。「オトノナイセカイ」「音の無い世界」「オト ナイ セカイ」「音 無 世界」。

各検索結果を全ページ隈無く見ていく。やはり大した記述を見つけることは出来ない。検索サイトを変えてみても結果は対して変わらない。

無駄に時間は過ぎていくが、俺に取って時間は大した問題ではない。

少し方向性を変えてみるかと、考えてみる。「音無」これでやってみるといのはどうだろうか。見当違いかも知れないが足踏みしていても仕方ないだろう。

検索の結果引っかったのは「音無川」「音無の里」「音無の滝」だった。どれも何か神秘的なものを感じる響きだ。

音無川は和歌山県本宮町を流れる川だそうだが、全くと言ってもいいほど噂とはほど遠いような気がした。里や滝にしても音無川と関連あるだけのようでやはり繋がるものではないようだ。

こうなったら「噂」で検索して徹底的に見ていくしか無いのか

も知れない。風漬<sup>ふうみづ</sup>し。もはやコレしかない。これは想像を絶する作業になりそうであることは明白であった。

そして探し始めて5時間。ついに見つけた。

『オトノナイセカイの噂』

それはとある掲示板に書かれた書き込み。

そこは様々な「噂」を書き込み合う掲示板のようだ。『噂サイト』でもいうのだろうか？ そこにたった一つだけ『オトノナイセカイ』の記述があった。

黒髪の女が夢に現れたら最後。

全部白くなる。

そしてオトノナイセカイに墮とされる。

### 「鎖3」 第参話：文弥2

ちくしょう。

メールの返信も無いばかりか電話にも出やがれねえ。どうなつてやがる。自分から「会いたい」ってメールしてきたクセに……俺をバカにしてるのか？

すでに日付は変わろうとしている。いつまで経っても連絡はない。いい加減に俺を振り回すな、今日はパチンコで散々な目にあって俺は気分が悪いんだ。

フミヤは何度もナナに電話するがいつまで経っても出ない。「何かあったのか？」と不安も過ぎるが、怒りが先に込み上げその可能性を切り捨ててしまう。

今日という日はおかしなことばかりだ。今朝辺りからおかしい気がする。一日を思い出そうとすると「ジジジ」と一瞬目の前が白くなってノイズのようなものを感じる。頭痛までしやがる。どうせ持病の偏頭痛だろう。

どうもあの話を聞いてから様子が変だ。あのムカツク野郎のせいとか？ って、んなわけないだろうけどな。

アイツの話はおかしなものだった。ニヤニヤ笑い出したかと思うと妙なことを言いやがった。

「こんな噂聞いたことあるか？」

噂なんて興味は無かったが、俺は興味のあるフリをして聞いてやった。

その女は突然、夢の中に現れるという。  
目を絶対に合わせてはいけない。

合わせたら最後、オトノナイセカイに連れられる。

どっかで聞いたような都市伝説まがいのものだった。所詮は噂だから何だ？

そんな顔を俺はしてたのかも知れない。その男は尚も笑いながら言った。

「こないだ死んだ社員のヤツも『噂』を聞いて死んだって話らしいぜ」

男はしきりに頭を掻きながら笑っていた。

どうもムカツク野郎だ。昨夜はこんな感じじゃなかった気がするんだが。何にしてもそんな噂なんてどうでもいい。そもそも「噂」を聞いて死ぬんなら、オマエも死ぬんじゃないのか？

「アンタ、近いうちに『オトノナイセカイ』にいつちゃうかもよ。なーんてな」

俺が思ったことが通じたのかは分からないが、男はそれだけ言うて去っていった。

結局その男とはその日、姿を見せなかった。アイツは一体何をしにきたのだろう。

そのことが気になった、という訳ではないが、パチンコは大負けした。散々だ。持ち金はすっかりなくなってしまった。

そして俺は何もすることがなくなり、結局このゴミ溜めのような家に戻ってきた。もちろん家に帰ったところでもすることもない。もはや虫の息のようなテレビを付けて暇を潰した。

晩飯すら食う金が無い。またナナから金貰うかと電話をかけるが出ない。そう言えば昼に一応メールしたが返信はまだ無かった。

ナナはいわゆる「お嬢様」だ。親が何かでかい会社の社長だという話は聞いている。たまたまナンパして付いて来たのがナナだった。その場のノリでホテルに入った。

俺みたいなナンパ野郎についてくるヤツはそのほとんどがいわ

ゆる軽い女だ。金持ちのお嬢様つてのもあったが、波長があつたというのかよく分からんが、すぐに付き合うことになった。

ナナは俺が何も言わないのに金をよくくれた。多分俺みたいなヤツに自分のステータスを見せつけたかっただけなんだろう。

俺はアイツに快楽を。アイツは俺に金を。それだけで良かったのかも知れない。

「ナナだよ　　ナナだよ　　」

携帯が鳴った。やつとかけて来やがったか　　。

この着信音はナナが自分で録音したものを俺の携帯に勝手に設定しやがったものだ。付き合った当初は気恥ずかしさやら嬉しさはあったような気がするが、今はウザくて仕方が無い。しかし設定をナナが勝手にパスワードでロックしたものだから俺には解除できない。

「ナナ！　おせえーよ！」

電話を取ると同時に罵声の如くナナに怒鳴る。そしてさらに怒りがフミヤを支配する。しかしナナはそれに応えようとはせず無言だ。その無言はフミヤにとって火に油を注ぐ行為でしかなかった。

「シカトしてんじゃねーよ」

低い声で言う。それはまるで相手を威嚇するかのようだ。

少し間を置き、その声はした。

「キミが”フミヤ”だな？」

男の声だ。年の頃は50歳くらいだろうか。間違い電話か？いや、そんなはずはない。あの着信音は確かにナナだ。ナナ以外にあり得ない　　。この男は誰だ？

なんとなく威厳を持つ、そんな雰囲気の声だ。しかしなんとなく見下したかのようなその口調とその声に俺は少し焦りを感じた。

少しの間を置き、警戒しながらも「誰だ？」と応えた。少しの沈黙が気を焦らせる。心臓の鼓動が早くなるのが分かる。



「私は菜々子の父親だ」

思いがけないその声の主に俺は絶句した。

何を言っているかわからない。以前に一度だけ会ったことがある。しかし俺の姿を見るや否や「キミの存在は認められるものではない。去れ」と言われた。見た目だけの判断。あの時の屈辱は忘れられない。あのクソ野郎……何様のつもりをしてやるっ……。

俺は電話を切ろうとした。いや、切りたかった。逃げたかったのかも知れない。しかしその電話の向こうから伝わってくる緊迫な空気。それがナナの親父から発されるものなのかは分からないが、それが俺に電話を切る勇気を与えてくれない。

俺は声を出すことすら出来なかった。

「菜々子が死んだ」

その男はそう言った。俺はその内容に耳を疑った。

コイツ何を言っている……。一瞬心臓が止まるかのような衝撃が襲ってきた。重い……。内臓の全てが逆流してきそうな妙な感覚。背筋に痛みが走る。何故か息苦しくなってくる。

そしてその男は無限とも思える間を空けた。恐らくだが実際には1分も無かったのだろう。しかし俺にはそれが数時間のようにも思えた。

「今日の昼のことだ。通夜で今まではたばたしていて報告が遅れたことは詫びよう。すまない。仮にも我が娘と『付き合っていた』ようだからな。ただ一言言っておく。私はキミを認めている訳ではない。娘の携帯を見て最後に連絡をしていたのがキミだったから、慈悲の思いで報告したまでだ。明日は朝から葬儀だが来て貰わなくて結構だ。娘の墓前にも現れないで欲しい。貴様にこれ以上娘を冒瀆されたくない。二度と姿を見せるな。以上だ」

そのナナの親父と思われる男は言うだけ言って一方的に切った。俺は何も言うことが出来なかった。ナナが死んだ？ 嘘だろ？ 突然の電話。中年の男。それに加えての悲報で俺は思考が停止す

るかのようだった。

何も考えられない。

目の前が真っ白になる。視界がゆがむ。俺はゴミ溜めのような自分の狭い部屋で立ち尽くし泣いていた。携帯を持つ力さえなくなっていた。

気づけば朝日が昇っていた。

「鎖4」 第四話：ヨネ2

まさかヤマザキの口から「噂」という言葉が出てくるとは思わなかった。彼はもつと現実的で目の前のことしか信じない、自分の見た真実以外は口にしなさそうなタイプの人間だったからだ。

ヤマザキと知り合ってまだ半年足らずだが、それくらい分かる。「なんすかそれ？」

俺は当然知らない。そんな噂より”それを聞くヤマザキ”に興味を持った。

ヤマザキとの出会いはこのBARだった。

上京して間もない頃、俺は特に宛ても無くブラブラと街を歩いていた。数日間、東京のありとあらゆるBARを渡り歩いた。たまに俺が歩いたこの渋谷で、まさかこんなBARがあるとは思わなかった。

たまたま入った脇道。そこにこの「Lanthanein」があった。

薄い照明で照らされた看板に「Lanthanein」の文字。俺はそれだけでその店に惹かれた。今思えば引き寄せられるかのようでもあった。

店に入るとそのセンスの良い店に俺は心を奪われた。バーテンダーとしての本能なのだろうか、「このカウンターでシェーカーを振りたい」。そんな思いが爆発する。こんなことは初めてだった。カウンターに立つのは身なりの良さそうな初老と言っても差し支えのなさそうな男だった。

白髪交じりの少し薄くなった髪は長く伸ばされ、綺麗に後ろで結われている。そしてほぼ真っ白と言っても差し支えない髭は鼻の下で上品さを伺わせる。丸めがねをかけ、その出で立ちにまるで

昭和初期の頃の軍人や貴族を連想させるかのようでもあった。しかしその顔つきや雰囲気からは人を安心させるようなオーラにも似たものを持っていた。

このバーテンダーに会うだけでもこの店に来たかいがあるなと俺は思った。こんなバーテンダーに俺もなりたい、そう純粹に思えた。

そのバーテンダーから注がれたビールを旨そうに飲んでいたのがヤマザキだった。

彼は今日と同じくカウンターの端に座って、独り飲んでいた。ヤマザキから一つ空けた席に座った俺は「あなたの思いをくれませんか？」とバーテンダーに注文した。今思えばなんであんなに「クサイ」言葉が出たのだろうか。今思い出すと赤面してしまう。しかしあの時、あのバーテンダーは「思い」を作ってくれた。その味に俺は泣いた。

決してこのバーテンダーは「凄腕」という訳ではなかった。テクニク、スキルその全ては自慢では無いが、俺の方が上だった。しかし彼は無言で俺にこう言ってくるかのようにだった。

「バーテンダーに一番必要なこと。それはお客様との時間を楽しめるかどうか。お客様の心境をどれだけ察するかです」

それが彼の言葉かはどうか分からない。だが彼の作ったカクテルはそのことを俺に教えてくれた。最高の一時だった。

変わった香りの煙草を吸うヤマザキはそのやりとりを静観していた。嘲笑う訳でもなく、俺の方を見て微笑んだヤマザキは「最高の客」に見えた。

ヤマザキはその出で立ちからは何を生業としているのか想像もつかない。

一見普通のシャツにダークグレーのジャケット、そして少し色の濃いデニムのジーンズに黒のラインが入ったスニーカー。それらが彼の為に存在しているかのようで、これが格好良いということなのかと俺は思った。

何の香りだろう？

そう思った俺は気づけばヤマザキに声をかけていた。

「良い香りですね。何の煙草ですか？ 輸入物ですか？」

との俺の問いかけにヤマザキは深く吸ったその煙を天井に吐いて言う。

「輸入物ってところだけが正解だな」

と口を開いた。

そしてビールに口をつけ、唇に泡を付けたまま言った。

「これはキューバものの葉巻だよ」

今日もヤマザキはその時の格好と同じく、ビールを飲み、キューバものの葉巻を吸っている。あの時と違うのは俺がこの店のバーテンダーだということだけだった。

「覚えてるだろ。前のバーテンダーの宮下さんを」

ヤマザキはいつになく険しい顔をしていた。

「ええ、もちろんですよ。あの方にもお世話になりました。俺が今ここでバーテン出来るのだって、宮下さんのお陰でもありますしね。俺にとって山崎さんも宮下さんも俺の恩人ですよ」

俺は宮下さんの好きだったジャズのCDを棚から探しながら答えた。

「今、この店にいるのは俺たち二人だが、あくまでこれは俺の独り言だ。気にしないでくれ。相づちもいらぬ。オマエはオマエの仕事をするればいい」

ヤマザキはそういうとビールの二杯目のビールを要求した。俺は新しいグラスにビールを注いだ。

「実は宮下さんは先日起こった殺人事件の犯人、宮下真人の父親なんだ」

遠い目をするヤマザキ。俺はその衝撃の事実を黙って聞いた。もちろん驚愕の事実ではあるが、俺の手はCDを探すのをやめるこ

とはない。ここは黙って聞くべきなんだ。

「息子さんはデザイナーだった。交際相手を刺殺。ちょうど事件はヨネがこの街にやってきた頃だった。息子のやった過ちに責任を感じた宮下さんは隠居した。今は故郷に帰ってるそうだ。どこかまでは分からんが」

葉巻を消したヤマザキは懷から煙草を取り出し、煙草に火をつけた。メンソール系の煙草のようだ。

「俺だって宮下さんとはそんなに親交が深かった訳じゃない。俺がこの店のデザインをしてからの付き合いだ。以来、俺は客、宮下さんはバーテン。それが全てだった。毎日のように来てたよ。この店に。俺の最高の日々だ」

灰皿に灰を落としながら煙草の火に目をやり、店内を見渡すヤマザキはどこか寂しげだった。

俺はようやく見つけたそのCDをかけた。静かにピアノの音色が店内を流れ始めた。

「世間では『宮下事件』とまで言った。メディアは面白おかしく伝えた。もちろん息子さんがやったことは許されるべきことではない。だがそれは法が裁くことだ。メディアが裁くことではない。そんな世間の目が耐えられなかったんだろうな。奇しくもあの事件から3ヶ月経ったクリスマスの日。あの日。宮下さんは引退を決めたんだ」

そう、俺がこの店にはじめて来た日だ。

「憎かったよ。世間やメディアが。息子さんが！そして宮下さんもな。だが、それは間違っていた。あの人は逃げた訳じゃなかった。この店を守りたかったんだ。引退。それがあの人の最後の仕事にかける想いだったんだ」

ヤマザキに、いや、宮下さんに「誇りを持て。自信を持て。何よりも仕事を『好き』でいろ」そう言われた気がした。

俺はバーテンダーを選んだ生き方に誇りを持つと思った。

そしてヤマザキは「おっと、独り言はここまで」と呟いた。そして残されたビールを一気に飲み干した。

そのジャズは何かもの悲しげだった。まるでヤマザキの心を、宮下さんの心を現しているかのようだ。再度俺はヤマザキにビールを入れた。そして「俺も飲ませて下さい」そう言ってグラスにブランデーを注いだ。

そしてヤマザキは「噂」について淡々と語り出した。

「その少し前のことだ。『噂』を聞いたのは」

「鎖5」 第五話：冬哉3

ヒサが聞いたという「ウワサ」。なにやら不気味で得体が知れない気がする。

俺たちは本当にこの噂に関わってしまったというのか？

あの時感じた「霊的」な違和感はこの「黒髪の長い女」なのだろうか。もしそうであれば俺たちも「オトノナイセカイ」に連れて行かれるのだろうか。

しかし不思議だ。俺も弥生子もこの得体の知れない「噂」のせいで恐怖に支配されようとしている。しかしこのユースケの余裕のある態度は一体どういうことなのだろう。

俺はしばらく考えた後、そのことについて問いただそうとした。しかし先に口を開いたのは再びユースケだった。

「なあ、トウヤ。この噂話だが、何かに気づかないか？」

どういうことだ？

ユースケは何が言いたいのだろう。その「何か」に俺は気づいていなかった。

「いや、分からない」

俺はそう答えた。

「胡散臭い。そう思わないか？」

「うさんくさい？」

俺はもちろんのこと、弥生子も訳が分からない。

「まあ、噂なんて全部胡散臭いわけだが……」

やれやれとユースケは首をかしげながら、なんで気づかないかなというような表情で言った。しかし俺は何を言われているのかイマイチ、ピンと来ない。

「すまん。あまりにもいろいろなことが分かってきて頭が回ってないのかも知れない……」

そう言ってから自分が言い訳していることに気づいた。別にそ



んなこという必要なんて無かったのかも知れない。というよりも何か馬鹿にされたような、そんな風に思えたのかも知れない。

「これはヒサから聞いた『噂』を俺がパソコンで打ってプリントしたものなんだが……」

そういうとユースケは紙を取り出した。それはA4サイズのコピー用紙のようで、そこには「ウワサ」が書かれていた。

「何点か『胡散臭さ』があるんだが……。まずは『黒髪の長い女』だな」

「黒髪の長い女」の箇所をなぞりながらユースケは言った。  
言われて気づいた。

文字で「ウワサ」を見ると確かに違和感がある。ユースケは俺の反応に「気づいたな」と目を光らした。弥生子もどうやら気づいたようだ。

「なるほどな。最初は気にもしなかったが……。『髪が長い』のか、『女が長い』のか？　ってことだよな？　聞くより見た方がよく分かるな」

俺はユースケに確認してみる。

「その通り。おかしいな表現だよな？」

「確かに変！　『長い女』とかちよーウケるんですけど」

弥生子に徐々に笑顔が戻った気がした。

確かにこの「ウワサ」はよく考えれば考えるほどおかしいものな気がしてきた。

「普通なら『長い黒髪の女』と表現すると思うんだよ。ヤエちゃんがいいうように『長い女』という表現が仮に正しいとしたら、それはもうギャグでしかないだろ？」

もっともだと思う。

「おかしいのはこれだけじゃない。もう一度よく見てくれ。この噂には『都市伝説』が含まれているんだ。つまり噂の中に噂がある」

ユースケは俺と弥生子にそう促すと、コーヒーに口を付けた。

俺は煙草に火を付け、もう一度じっくり見てみる。弥生子は携

帯を取り出しメモを取り始めたようだ。俺もそれに倣って携帯のメモ帳に「ウワサ」を書き込んだ。

注意しながら読み直すがユースケのいうことの意味はよく分かなかった。

「すまん。全体的に違和感を感じるけど分かんないよ」

俺は正直に伝えた。

「まあ、普通なら気づきにくいかな。『血液型占い』。これが『都市伝説』だ」

これには流石にずっと黙っていた弥生子も反応した。弥生子は血液型占いが好きでよくその手の本を読んだりしていたからだ。

「相当浸透しちゃってるし、生活の一部として溶け込んでるから気づかないかも知れんが、『血液型占い』も『都市伝説』みたいなもんなんだよ。この占いで性格判断をやってるのは日本と韓国と台湾だけなんだ。しかもこれは日本が発祥なんだぜ？ とある学者が統計学で出しただけのことで、それを本にしたらたちまちヒットして気づけば根付いただけなんだ。根本的に科学的根拠は全くないんだ」「えー。でもケツコー当たるよー」

ユースケの話に批判するように弥生子は言った。

確かに当たることもあるけど、ユースケの言うように統計学を基礎としているなら確かに頷ける話かも知れないだ。オマケにあの手のものは「どっちともとれる回答」であることも多い。「当たってる」と思えば当たってるし、「外れてる」と思えば外れてる。

俺はそれを理解すると弥生子に簡単に説明した。

あまり納得出来なかったようだが、とりあえず「この場合はそういうことにしとけ」と軽く流させた。

その間、ユースケはドリンクバーで再度コーヒーを入れに行った。

ふと携帯を見ると母さんからメールが来ていた。晩飯が出来ているから早く帰ってこいとの内容だった。俺は弥生子と一緒にユースケと会っていると伝え、もうすぐしたら帰ると報告した。

そしてユースケが戻ってくると、今入れてきたばかりのコーヒ  
ーを少し口を付けたところで再び語り始めた。

「今言ったようにこの噂だが……」

と前置きを置いたユースケは俺と弥生子を交互に見て言う。横  
に座る弥生子は軽く頷く。

「これは創作されたものである可能性が高い。だが、すでに俺たち  
は二箇所から情報を得た。これが少し気になるところだ。それと気  
になるのは『夢』と『女』だと思う。それに加えてやはり『オトノ  
ナイセカイ』の正体だな。まだ情報が足りない。ヒサにしても噂を  
調べて欲しい理由について一切口にしないんだ。まだ何かある気は  
する。どうもアヤちゃんに手がかりがありそうだ。おまえらはそっ  
ちを探ってくれないか？ 俺は別の線から探してみる」

ユースケの言うことはもっともだと思う。俺と弥生子はアヤち  
ゃんを探ってみるべきだ。とても弥生子一人で関わるべき問題じゃ  
ないと思った。

とにかくもう遅い時間だ。時計の針は気づけば9時半を差して  
いる。もう帰るべきだろう。

「よし、じゃあ俺と弥生子でアヤちゃんに会ってみる。会えば何か  
分かるだろう」

俺は言った。弥生子もそれに賛同した。

「ああ、そうしてくれ。あ、そうだ、ヤエちゃん。悪いけどアヤち  
ゃんからのメールを全部転送してくれないかな？ ちよつと気にな  
ることがあるんだ」

ユースケはそう言い、メールアドレスを弥生子に教えた。弥生  
子もそれに承諾し、アヤのメールを転送した。

「よし。もし何か分かったら連絡する」

そして俺と弥生子はユースケに別れを告げた。

店から出ると雨が降り出していた。降り始めたばかりのせい  
か熱気で湿度がかなり高い。ジツとしているだけで汗が滲んでくる。

ジジジ……

一瞬、ノイズのような目眩がする。体が畏怖<sup>いふ</sup>するかのようになり、ソクツと背筋が凍るような視線を感じた。しかし辺りを見回しても弥生子以外誰もいない。弥生子は一瞬不思議そうな目でこっちを見たが、「なんでもない。帰ろう」と俺は言い、車に乗り込んだ。

結局、この日はそれ以上の進展はなかった。

## 「動1」 第巻話：チェーンメール

「ちよつと来るの早かったかな……」

すでに深夜0時を過ぎ、日付は10日に変わっていた。トウヤと待ち合わせをしていたユースケは一足早くファミレスに訪れていた。昨日、いやもう日付が変わったから正確には一昨日だが、三人で待ち合わせたファミレスだ。まさか連日で来ることになるとはな、と苦笑する。

明日、と言っても今日だが、日曜のためだろうか、こんな夜中だというのにも関わらず客はなかなか多い。若い客が多いせいかもしれない。

前回と同じくドリンクバーを頼み、コーヒーを入れる。相変わらず大して旨くない。

持ってきたノートパソコンをカバンから取り出し起動する。そして無線の電波を受信出来るかを確認する。問題無くインターネットは出来るようだ。最近は何処でも無料で無線LANを使えるから便利なものだ。

簡単にメールチェックを行い、特に大したメールも来ていないことを確認すると、『オトノナイセカイ』と名付けたテキストファイルを開く。

これは「ヒサから聞いた噂」とヤエに送られてきた「アヤのメール」についてまとめたものだ。実際は単に忘れないようにメモしている程度のものだ。

一時間ほど前にトウヤから受信したメールには「メールで気づいたことがある」と書いてあった。今日ここへ来たのももちろんその件のためだ。

そんな報告もあって、ユースケは何度も「アヤのメール」に目を通すが、その「トウヤの気づいたこと」が何なのか分からない。

そんな時、携帯に一件のメールが入った。トウヤか？ と思っ

たがヤエだった。

『アニキにもメール打ったんだけど、なんか胸騒ぎがする』

そう言えばトウヤとヤエには靈感があると言っていたことを思い出した。案外その「胸騒ぎ」というものも無視出来ないかも知れない。わざわざ俺にまで送ってくることを考えるとなおさらだと考え、

『わかった。ヤエちゃんが言うなら何かあるのかも知れない。俺も注意するよ』

とユースケは返信をしておいた。

すると少しの間も置かずに着のメールを受信する。

やけに返信が早いなと思い、確認をするがそれはヤエからのメールではなかった。もちろんそれはトウヤでもなければ友達や知人でもないし家族でもなかった。

そのメールのアドレスは全く見覚えのないものだった。

ランダムな文字列のようにも見える。@マーク以下のドメインにしても全く知らないものだ。件名は何も書かれていない。どうせろくでもないメールなのだろうと不振に思いながらもそのメールを開く。

『このメールを見たら30分以内に友達や知り合いに転送しましょう  
う 最低でも5人くらいはヨロ え？ 転送しなきゃどうなる  
かって？ アハハ 殺しに行っちゃいますよ？ 紅い鞠が転が  
りました。次は白くなっちゃう！ ばいばい』

ユースケの顔が一瞬強張る。しかし内容はどう見てもチェインメールだった。

チェインメールとは連鎖的に不特定多数への配布をするように求める手紙、所謂『不幸の手紙』というヤツが発祥だ。

もう10年も前だろうか、当時はまだインターネットが今ほど

浸透しておらず、ユースケもまた中学生でパソコンに触れ始めたばかりのことだった。当時のユースケも親にせがんでパソコンを買って貰い、インターネットに繋がった。当時はまだISDNが普及し始めていた頃のことだ。まだ自分の周りでもインターネットをしている者は少なく、学校の友達には「インターネットってなに？」と聞かれるような、そんな時代だった。

その頃、数少ないがユースケにはメールを交換していた人がいた。

その彼（彼女？）とはネット上のメル友募集サイトで知り合った。毎日メール交換をしていたが何度かその人からチェーンメールを貰ったことがあった。「だるまの話」「サザエさんの最終回」「ドラえものの最終回」「某番組の企画」「お金持ちになる方法を教えます」などだった。大して記憶に残っていないが、他にも様々なものがあつた。今思えばどれも「都市伝説」と呼ばれるものばかりだったかも知れない。当時のユースケにしてみれば新鮮でその未知の話に恐怖したものだ。

今では「バトン」などと言われるものの方が多くなり、その数は無限に増えている。その特性はチェーンメールとは違ってきているが、特にSNSなどに多いようだ。ソーシャル・ネットワーク・サービス

半ば強制的で押しつけがましい点が類似している。チェーンメールにしてもバトンにしても元は「不幸の手紙」が源流であることは違う。

今時チェーンメールかよ。流行んねーよ、とユースケは苦笑する。

軽いノリでありながらもその内容は不謹慎だ。「『殺す』だとはいいはいワロスワロス。やれるもんならやってくだしあwww」って感じだな。当然無視をする。

しばらくすると再び携帯が鳴る。今度はアヤからのメールだ。「うん。そーして。カンケーないだろうけど、なんか変なチェーンメールも来るし心配」

どうやらアヤにもあのチェーンメールが届いたようだ。

ヤエのメールを見たユースケは苦笑する。実際に会つてるときは敬語なのにメールだと違うんだなと思ったからだ。見た目は今の女子高生だが、ヤエは意外としっかりしているのだろう。

しかし同じような時間に来るのも少し妙だなとも思ったが、その多くのチェーンメールは最近ではいわゆる「出会い系」の宣伝メールと同じようなもので、いわゆる「業者」と称される者が発信していることが多い。そう言った業者は専用のプログラムを用い、予め購入した不特定多数のメールアドレスに一斉送信するようだ。故に同じような時間に届いていてもなんら不思議ではない。

『ヤエちゃんにも届いたのか。バカっぽいけど、なんか不気味だな。間違つても転送すんなよw 今、トウヤとあのファミレスで待ち合わせてるんだ。何か気づいたことがあるらしい』

ユースケはそう返信するとインターネットで念のために届いたばかりのチェーンメールを検索にかける。しかしその検索結果は皆無であつた。まだ新しいチェーンメールなのだろうか。

返信して間もなく、ヤエから

『え？ ユースケさんにも届いたん？ まっじい？ ウザくね？ w 分かつてるよ 転送なんてする訳ないじゃん！ (´・`・\*)』

アハハ アニキが何かに気づいたの？ また教えてね 』

とメールが届く。

その後、ユースケは「オトノナイセカイ」について検索してみることにした。ヒサから噂を聞いたときに検索をかけて以来だ。あの時は全く検索に引つかからなかった。しかしあれから時が流れたせいか、「オトノナイセカイ」についていくつかの結果を得ることが出来た。

なんと、ヒサから聞いた噂の他にもう一つ別の「噂」が出てきたのだ。大まかな内容にその違いは無いが、ヒサから聞いた噂と比べると随分簡略されたかのような内容だった。「夢」「女」これらに変化はない。ただ「長い」という言葉は消えている。



気になる点は一つ。「白くなる」という言葉が出てきているのだ。

「ん？ さっきのチェーンメールでも『白い』と表現があった。まさか関係が？」

思わず口に出してしまう。

どうも「オトノナイセカイ」を知ってから、少しずつ自分の周りに変化出てきたように思えてならない。たかが噂、都市伝説の出来損ないみたいなモノになんて振り回されなくちゃならないんだ。しかし何かとんでもないことに巻き込まれ始めているのではないかと一瞬脳裏に過ぎる。得体の知れない何かが確実に近づいているように思えるのだ。俺たちは触れてはならないモノに触れようとしているのではないだろうか。ユースケの心に不安は募る。

噂の一文をコピー＆ペーストで『オトノナイセカイ』のファイルに書き写す。そして念のため、チェーンメールを携帯からパソコンに転送し、ファイルに書き写した。簡単なメモ書きもしておく。何度見ても何も分からない。トウヤは何に「気づいた」のだらう。

## Tips・1 「ユースケメモ」

オトノナイセカイについてのメモ

### 【ヒサから聞いた噂】

夢の中で黒髪の長い女が誘う。その女に狙われると逃れられない。

女は言う、「あなたの血液型を教えて」と。そして答えるとそ

の血液型が何であれ、「あなたとは相性が合わない」と言い、「オトノナイセカイ」に連れて行かれる。

【ネットで見つけた噂】

黒髪の女が夢に現れたら最後。全部白くなる。そしてオトノナイセカイに堕とされる。

【アヤメール】 不要と思われる箇所は削除済み

『8/8(金)00:30:意いフエ音ふいふえmおいrhnfamれい1jgれおj::mlgk:』  
『8/8(金)00:38:じょpつえjeを@p、ヤエしtかいひおえroj:頼れおjp6jを:ああ』  
『8/8(金)00:50:kごsふえplhfrgk@iげl@plk@prgえpk@agけおkbげおpjつつつge1rjほrjhml:rqi494ohktrk@助けて』

【チェーンメール】

このメールを見たら30分以内に友達や知り合いに転送しましょう 最低でも5人くらいはヨロ え? 転送しなきゃどうなるかって? アハハ 殺しに行っちゃいますよお? 紅い鞠が転がりました。次は白くなっちゃう! ばいばい

・ヒサから聞いた噂とネットで見つけた噂の違いが気になる。「長い」ってなんだ?

・ネットで見つけた噂とチェーンメールに共通する「白い」という言葉が気になる。

・アヤメールについてトウヤは気づいたことがあるらしいが?

ここまで8月10日現在の情報。時間は0時半。トウヤなかなか

か来ねえな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3259f/>

---

音の無い世界 ～オトノナイセカイ～

2010年10月26日04時52分発行